

オーストリアのフォラールベルクにおける刺繍織・ レース工業の発展：その起源と産業化時代に焦点を 当てて

山本，健兒
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7391572>

出版情報：経済學研究. 92 (1), pp.1-40, 2025-10-31. Society of Political Economy, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



オーストリアのフォラールベルクにおける 刺繍織・レース工業の発展

— その起源と産業化時代に焦点を当てて —

山 本 健 児

1. はじめに
 2. 産業化時代前期までにおけるフォラールベルクの刺繍織・レース工業
 - 2.1. 日本人による先行研究
 - 2.2. フォラールベルクの産業化時代とはいつのことか？
 - 2.3. 産業化時代前期までの実態を明らかにしている研究の同定
 - 2.4. 18世紀前半期のフォラールベルクの経済と刺繍織工業の導入年
 - 2.5. 東スイス・フォラールベルク間の刺繍織加工貿易を仲介したフェルガー
 3. 刺繍織・レースの機械生産化
 - 3.1. 鎖編刺繍機の導入
 - 3.2. 手動刺繍機械の導入
 - 3.3. シフリ刺繍機械の導入
 - 3.4. フォラールベルク最大の刺繍織企業
 - 3.5. 国立刺繍織専門学校の設立
 4. 20世紀前半期の動向と不況期における政府の政策
 5. おわりに
- 注
文献
英文要旨

1. はじめに

わが国の経済地理学において地場産業は重要な研究テーマの1つである。この研究を牽引した板倉勝高、井出策夫、竹内淳彦の3名は、1969年と1972年に当時インスブルック大学地理学研究所助手だったペーター・モイスブルガー (Peter Meusburger) の案内でオーストリアのフォラールベルク州ルステナウ (Lustenau)¹⁾の刺繍織・レース工業の実態調査を行ない²⁾、これをルステナウの地場産業であると理解してま

ず井出 (1970) が、ついで竹内 (1974) が、そして板倉 (1975、1978、1981) がその調査結果を公表した。しかし、それらを読み比べると、微妙な、しかし看過できない違いがあることに気がつく³⁾。その詳細については後述する。

他方、スイス経済史研究の専門家である黒澤隆文 (2002) が、東スイスの産業革命を論じる文脈でフォラールベルクにおける「刺繍業」⁴⁾の起源やその後の展開について典拠を丁寧に提示して詳しく論じている。彼が扱った時代は限定されているのでやむを得ないことではあるが、

フォラールベルクの「刺繍業」が東スイスのザンクトガレン (St. Gallen) 商人の支配下に置かれていたことを、主としてスイスの文献 (Wartmann 1875) に依拠して強調している⁵⁾。そうすると、ルステナウが刺繍織・レースの地場産業産地であるという板倉たちの主張とどう整合するのか、という問題が浮かび上がる。

そこで本稿は、「繊維のくに (Textiland)」と自称していたフォラールベルクにおける刺繍織・レース工業⁶⁾の誕生と発展について、主としてフォラールベルクの識者や関係機関が公表した文献とこの地域の産業化初期に関するオーストリア人経済史家による研究とに依拠して、1930年代までに焦点を当てて論ずることを目的とする。

このように本稿の課題を限定するのは、もともと筆者の研究目的が現在のフォラールベルク経済の実態を解明することにあったことと関係している。筆者は2015年以来オーストリアのフォラールベルク州という地域の経済を調査研究してきた。それはこの地域が大都市圏から遠く離れ、域内に大都市がない農村的地域であるにも拘わらず経済活力旺盛であることを同国の経済統計から知ったからであり、その秘密を明らかにしたいと考えたからである。その研究成果は山本 (2024) という形で公表したが、刺繍織・レース工業については論及できないでいた。だが、現在のフォラールベルクにおけるこの工業の状況を理解するためには、その歴史をできるだけ正確に把握することが必要である。そうすることによってこの地域の全体像把握がより一層可能になる。これが本稿執筆の動機である。

そこで本稿では、まず前述した地場産業研究の先達3名及び黒澤による研究を紹介し、疑問点を提示する。ついで、フォラールベルク在住

の研究者やこの工業に直接関わる人物あるいは機関などによる記録に基づいてこの地域での刺繍織・レース工業の起源について、明らかなこととそうでないことを識別する。その上で、フォラールベルクでの刺繍織・レース工業の機械化とその1930年代までの展開過程を描く。

実はドイツ語文献の間にも年次の確定など、事実認識に違いが認められる。そこで本稿では、そうした違いの中でどれが信頼に値するかを判断するために、各文献での記載が何に依拠しているのかという点にも論及する。本稿は、史料に基づく本格的な産業史研究ではなく、産業史を論じた研究文献や後世の記録をレビューすることによって、日本では余り知られていないフォラールベルクの刺繍織・レース工業を理解するための、言うなれば予備的作業として可能な限り正確な事実を掘り起こそうとするものである。筆者がもともと意図していたフォラールベルクにおける刺繍織・レース工業の現状に関する解明は、20世紀後半のそれも含めて、本稿に続いて公表を予定している別稿に委ねる。

2. 産業化時代前期までにおけるフォラールベルクの刺繍織・レース工業

2.1. 日本人による先行研究

井出 (1970: 27) は、フォラールベルクに刺繍生産が伝わったのは18世紀末であるが、「工業として成立をみたのは19世紀になってハンドマシンがスイスから導入されてからのことと云われる」と述べ、その根拠として F.G. Winsauer による 100 Jahre Vorarlberger Stickereiindustrie を挙げている。しかし井出 (1970: 34) に記されたその書誌情報は不完全である。そして、ルステナウでの機械による刺繍織・レース工業の開始時

期について1890年頃からであると述べているが（井出 1970: 31）、その根拠を明示していない。竹内（1974: 69）はフォラールベルクに「Stickerei 工業が入るのは18世紀であるが、それが工業として成立をみるのは19世紀に Handstickmaschine がスイスから導入されて以来である」、と井出よりも大まかに述べているが、その根拠を明示していない。板倉（1975: 18、1981: 101）は18世紀中葉にザンクトガレンからフォラールベルクに刺繍が導入されたと述べているが、やはりその根拠を明示していない。3名によるフォラールベルクでの刺繍織・レース工業発展史に関する主たる情報源はモイスブルガーによる教示と推定されるが、その際の聴き取りメモの違いが上のような齟齬の原因ではないかと思われる。

以上の3名に対して、フォラールベルクにおける綿工業や刺繍織・レース工業を論じた黒澤（2002: 93-113、327-344）は、「遅くとも1763年までには、ザンクト・ガレン商人によって刺繍業が導入された」と、ウィーン大学での博士論文（Hagen 1947）や Fitz（1985）に依拠してその107頁で断言している。また、「1773年には、フォルアルベルクから東スイスにかけての地域ですでに約6000人が刺繍業に従事していた」し、「フォルアルベルクを含むボーデン湖周辺地域の刺繍業就業者は3万人から4万人に達した」こと、刺繍の生産と流通を掌握していたのはザンクトガレン商人であり、「地元商人の活動はフェルガーとしての従属的なものに限られたが、生産自体は、東スイスよりもむしろライン河右岸のフォルアルベルク、ボーデン湖岸で盛んであった」と黒澤（2002: 110-111）は述べている。その上で、「フォルアルベルクは、ザンクト・ガレンとアッペンツェルの綿工業、とりわけ刺繍業の成立と共に、これらといわば一つの生産地域

を形成するに至った」とするヘルマン・ヴァルトマン（Hermann Wartmann）⁷⁾の考えを紹介している（黒澤 2002: 111）。

フォラールベルクの刺繍業について詳しく述べた「東スイスとフォルアルベルクの刺繍業」と題する節（黒澤 2002: 327-334）では、19世紀においてザンクトガレンでは超高級品である平刺繍刺繍品（Plattstichstickerei）が、フォラールベルクではこれよりも品質においてやや劣りはするが高級品である鎖編⁸⁾刺繍品（Kettenstichstickerei）がザンクトガレン商人の主導によって生産されるという分業関係があったこと、そしてザンクトガレン商人とフォラールベルクで刺繍生産に携わる人たちとを仲介したのはフェルガーと呼ばれた前貸請負人であると黒澤（2002: 328）は述べている。フォラールベルクで自ら事業経営リスクを負う企業家が出現したのは20世紀になってからとする Nägele（1949: 196）の所説も紹介されている（黒澤 2002: 329）。さらに、刺繍機械が開発されて量産での刺繍織が推進されるようになった19世紀末においてもなおザンクトガレンの輸出商人が刺繍生産の統括者となり、「刺繍工場主は単なる下請と化した」（黒澤 2002: 333）と Wartmann（1875）などに依拠して述べている。

以上のような黒澤によるフォラールベルクにおける「刺繍業」の実態についての解釈は示唆に富む。しかし、東スイスとフォラールベルクの「刺繍業」の工場制への移行が1890年代以降に進んだが、「第一次大戦以降は再び問屋制に基づく家内工業的な生産への逆転が起こり」、「流行に左右されやすく、また奢侈品的性格で恐慌の影響を受けやすい刺繍業では、固定資本を低く保つことのできる家内工業的生産組織が、柔軟な生産体制として有利さを維持した」との黒

澤 (2002: 341-342) による概括は、後述するフォラルベルクの刺繍織・レース工業に関する現地での記録に照らすならば疑問なしとしない。フォラルベルクでは機械を用いての工場制に基づく刺繍織・レース工業が遅くとも1880年代に出現したし、これは黒澤の言う問屋制的な家内工業的生産組織を最初から伴いつつも、東スイスの商人たちの支配から脱する動きもあったからである。これらの点については次節以下でフォラルベルクでの記録に基づいて詳述する。

さらに黒澤は「都市への集中と工場制生産に反感を持つ東スイスやフォルアルベルクの人々が、分散的な生産が可能な産業部門を意識的に選択していった」(S.343) と述べ、「東スイスとフォルアルベルクの綿工業の発展過程は、「工場制化」という意味での直線的な工業化の過程ではなかった。紡績業などとは対照的に、この地域の農村家内工業の繁栄は、もっぱら安価で質のよい労働力の大量投入に立脚しており、いわば工業的発展の後衛部門としての性格を有していた。しかしながら、これらの農村家内工業部門こそが、早くから工場制工業に転じた紡績業に対する需要を支え、また19世紀全般にわたって膨大な雇用を創出し続けて、地域経済を支えた」(S.344) との総括的特徴づけは、チューリヒでの綿紡績工業の発展との対比という意味では首肯できるとしても、刺繍織・レース工業を含むフォラルベルクの繊維工業の性格描写という意味では問題なしとしない。その理由は、フォラルベルクでも綿紡績・綿織物の比較的規模の大きな製造工場が既に19世紀半ば頃に出現していたからである⁹⁾ (Feurstein 2009: 99-137)。刺繍織・レース工業が農村家内工業に支えられていたことは事実であるが、後述するように工場制での生産も1880年代から進展した

からである。ただしその工場が相対的に小規模であり続けたことは事実である。なお、上の引用文で言う「地域経済」とはフォラルベルクのことではなく、東スイスを中心としてその中にフォラルベルクも含むかなり広大な地理的範囲を黒澤が指していたことは文脈から明らかである。

2.2. フォラルベルクの産業化時代とはいったい何か?

フォラルベルクの刺繍織・レース工業の由来や発展、そして近年の状況に関しては、地元識者による研究が豊富に積み重ねられてきた。その全貌を明らかにすることは筆者の能力不足の故にできないが、それでも2022年と2023年にフォラルベルクで行なった現地調査の際に州立図書館でも関連文書を検索閲覧し、直感に基づいて重要と看做したいくつかの文献に基づいて、まず産業化時代のうち1880年代までの発展について述べる。

筆者はドイツの産業化時代についていくつかのドイツ語文献などに基づいて19世紀初めから20世紀初めまでの期間であると記したことがあるが (山本 2025: 13-15)、この時代認識は現在のオーストリア領域についても概ねあてはまる。その理由は、オーストリアあるいはその最西端のフォラルベルクの産業化はドイツに比べて若干遅れたとはいえ、大きな差はないからである。フォラルベルクの近現代史を論じた正史ともいえる Pichler (2015: 30) によれば、既に1872年にボーデン湖岸でバイエルンとの国境に近いローハウ (Lochau) からフォラルベルクの都市として最南端に位置するブルーデンツ (Bludenz) までの約60kmを走る鉄道が開通し、同年にスイスやバイエルンの鉄道ネットワーク

と結合した。1884年にはインスブルックと結ぶアルルベルク鉄道も開通した (Pichler 2015: 32、なおフォラールベルク内の地名については図1及び図2を参照されたい)。こうした交通インフラが整備されたのは、それへの大きな需要が既に存在していたからである。フォラールベルク文書館に所蔵されている史料に基づいてその産業化の状況を克明に明らかにした Weitensfelder (2001: 102-107)¹⁰⁾ によれば、機械を用いた綿紡績工場は既に1820年代から、機械式綿織物工場は1830年代からフォラールベルクの各地で設立されていたし、その中には19世紀の産業化を推進する上で主導的役割を果たしたフェルトキルヒの商家出身であるカール・ガナール (Carl Ganahl)¹¹⁾ や、現在でも有力企業としての地位を維持して発展しているゲッツナー繊維 (株) の創業者クリスティアン・ゲッツナー (Christian Getzner)¹²⁾ など、地元企業家も少なからずいたのである。フォラールベルクでの繊維生産は、黒澤 (2002) によって印象づけられる可能性がある東スイスの企業家の直接投資だけによる工業化というわけでは必ずしもない。

2.3. 産業化時代前期までの実態を明らかにしている研究の同定

前項の叙述から、フォラールベルクの産業化時代前期とは1880年代頃までの時代を意味することが了解されよう。この時期のフォラールベルクにおける刺繍織工業に関する地元識者などによる文献として重要なのは、Nägele (1947)、Nägele (1949)、Winsauer (1965)、Winsauer (1968)、Winsauer (1978)、Heinzle (2018) などである。また、前述した Weitensfelder (2001) と、これの元になった Weitensfelder (1999) も重要である。この後者は州政府の委託によって

執筆されたことが明記されている。

以上の著者のうちハンス・ネーゲレ (Hans Nägele) はゲッツイス (Götzis) で1884年に誕生し、1973年に亡くなったジャーナリストであり (Land Vorarlberg 2005: 280)、既述のようにフォラールベルクを「繊維のくに」と称する書籍を執筆した人物で博士の学位を持つ。井出 (1970) で言及されたフランツ・ヴィンザウア (Franz Winsauer) は1923年から1957年までの34年間にわたってドルンビルンにある国立刺繍織専門学校 (staatliche Stickereifachschule) (後の連邦立繊維学校 Bundestextilschule)¹³⁾ 校長を務めた人物であり、その職に就く前にはプレーゲンツ職業学校の教師を務めていた (Winsauer 1965: 71)。その教師生活約40年間にわたってフォラールベルクの刺繍織内職者及び刺繍織・レース工業の発展のための指導的役割を果たしたがゆえに (Winsauer 1965: 7)、それらについて熟知していた人物である。オリヴァー・ハインツレ (Oliver Heinzle) はルステナウ歴史文書館館員でこの町の歴史に関する研究者である。2023年5月に筆者は直接彼と面談し、種々の教示を受けた。

上記の諸個人が執筆した著作だけでなく、先に言及したフォラールベルク商業会議所 (現在のフォラールベルク経済会議所) 設立100周年を記念して編纂された分厚くかつ大型の書籍 (Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952) や、ルステナウの刺繍織・レース工業100周年記念誌 (Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie 1968) も重要な資料である。2024年に開館した刺繍織・レース産業博物館 (S-MAK) や地元団体の各ホームページ¹⁴⁾ から入手できる情報もある。

上記以外にも、フォラールベルク経済文書館

(Wirtschaftsarchiv Vorarlberg) に勤務する経済史研究者クリスティアン・フォイルシュタイン (Cristian Feurstein) が近現代の同州の経済史に関する包括的な研究書 (Feurstein 2009) を著わしているし、先に言及した政治経済文化に関する総合的な正史とも言える Pichler (2015: 35-39)、そしてインスブルック大学、ウィーン大学、ウィーン経済大学 (旧名ウィーン国際貿易大学) などでの学位論文も貴重な文献であり、その一つに Linder (1956) がある。井出 (1970) がフォラールベルクにおける刺繍織・レース工業の分布図を描くために用いた資料は、Linder (1956: 27, 28, 31-34) に掲載されているデータであり、鎖編刺繍織の生産は1952年当時の、そして機械刺繍織の生産は1946年当時のものである。

以上の筆者が直接閲覧した文献のうち、Nägele (ネーゲレ) や Winsauer (ヴィンザウア) の著作は記述の根拠とした資料を注記で明記しているわけではないが、それぞれの本文中で、オーストリア・ハンガリー帝国時代の地方統治の仕組みでいくつかのゲマインデを束ねる領域単位で設けられた裁判所区 (Gerichtsbezirk) の長官によるインスブルックに駐在するオーストリア皇帝代官への報告書、同時代の地元教会の記録や新聞、刺繍織・レース製造工場主の団体や、その下請として機械を所有して家族総動員での家内工業を営んでいた小営業者の団体などに蓄積された記録文書をもとにして歴史を復元していると判断できる。前述した Weitensfelder (2001) が刊行されるまでのフォラールベルクの繊維工業について1950年代以降に著わされた文献の多くは、管見の限りで Nägele (1949) に基づいてフォラールベルクの繊維工業発達史を概観しているが、Nägele (1947) はその要約版とも言えるべき著作であり、巻末に参考文献が列

挙されている¹⁵⁾。Heinzle (2018) には既存研究文献に依拠した記述もあるが、ルステナウ歴史文書館に所蔵されている史料に依拠した分析は信頼できる。

そこで以下、上の諸文献に基づいてフォラールベルクの刺繍織・レース工業の産業化時代前期までの歴史を描く。ただし、信頼できる文献相互の間にも年次確定や場所の特定などにおいて齟齬があるので、いずれが正しいのか、筆者なりの批判的考察を行なう。

2.4. 18世紀前半期のフォラールベルクの経済と刺繍織工業の導入年

ドイツ語圏経済史での常識に属することであるが、南西ドイツは中世の時代から麻の栽培と農村工業としての麻織物の生産が盛んだった。そしてボーデン湖沿岸の都市コンスタンツ (Konstanz)、あるいはこの湖に近い位置にあるラーヴェンスブルク (Ravensburg) やザンクトガレンは麻織物商取引中心地として発達していた。ボーデン湖南東岸に浮かぶ小島の小都市リンダウ (Lindau) は、南ドイツ各地とイタリア北部とを結ぶ通商路で陸上輸送と湖上輸送の貨物積み替え地点として栄えた。しかしフォラールベルクは貧しい農山村が点在していた地域であり、材木、干し草、亜麻、大麻が生産されており、穀物の生産はわずかだった。ただし比較的大きな農場では果物、肉、牛乳、バター、チーズも生産されていた。(Weitensfelder 1999: 5)。

フォラールベルクでの生産物に変化し始めたのは18世紀半ば頃からであって、スイスから木綿加工の仕事が入り始めた。スイスのザンクトガレンに木綿を用いる生産を導入したのはフランスから移住してきたユグノー教徒であり、

1721年のことだった。アッペンツェルでの木綿製品の生産は1730年に始まった。ドイツのアルゴイ (Allgäu) やフォラールベルクに木綿製品の生産を持ち込んだのは東スイスの商人であり、18世紀半ば頃のことだった (Weitensfelder 1999: 5)。

Nägele (1947: 23) によれば、刺繍織の仕事がフォラールベルクに導入される以前に、既にこの地域の農家は手作業による綿の糸紡ぎ (Spinnen) を内職で行っていた。Winsauer (1965: 11) も、綿紡績・綿織物の生産が機械化されると、それまで手作業での糸紡ぎや織物を内職生産してきた農家はその仕事を失ったが、新たな手作業での副業として刺繍織という仕事が入り込まれ、農家はこの仕事に携わるようになったと述べている。

そのフォラールベルクに刺繍織工業を導入したのは、ザンクトガレンの商家ゴンツェンバハ (Haus Gontzenbach) で1953年の200年前という表現で1753年のことだった、と Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 184) は断定している。しかし、その根拠は明示されていない。この文献の同じページに、当時は完全な手作業での生産であり、Veredlungsverkehr (加工貿易) としてフォラールベルクにその仕事が入り込まれたと記されている。

Feurstein (2009: 177) も、1930年代に刊行された郷土史に掲載された論文 (Fink 1931) を典拠としてザンクトガレンの商家ゴンツェンバハがブレーゲンツァーヴァルト (Bregenzerwald) で鎖編刺繍 (Kettenstich-Stickereien) を仕立てさせたことと断定している。

こうした1753年導入説の発端は、黒澤 (2002) がたびたび参照指示している Wartmann (1875)¹⁶⁾ であると考えられる。Weitensfelder

(1999: 6) は、Wartmann (1875, Bd.1: 100) を典拠として、フォラールベルクでモスリン刺繍織 (Mousselinestickerei) 生産が開始されたのは1753年でありブレーゲンツァーヴァルトにおいてであったと述べるとともに、フォラールベルク州立文書館 (Vorarlberger Landesarchiv) 所蔵史料のリンゲナウ年代記 (Chronik von Lingenu) を典拠として、1763年頃にスイス出身の刺繍織職人がブレーゲンツァーヴァルトのシュヴァルツェンベルク (Schwarzenberg) 村の少女らに刺繍織を伝授したと述べている。さらに Fitz (1985: 217) に基づいて、1768年頃にクルムバハ (Krumbach) で刺繍織の仕事が普及するようになったと Weitensfelder (1999: 6) は述べている。クルムバハはブレーゲンツァーヴァルトの中では比較的標高の低い北部に位置する村である。他方、シュヴァルツェンベルクはこれよりも南のブレーゲンツァーヴァルト中部に位置する村である。

ところで、Winsauer (1965: 44) には、スイスからフォラールベルクへの刺繍織の導入年に関するヴァルトマンによる解釈の文章が、そのまま引用されている。その最初の文章は次のように和訳できる。

「1753年にゴンツェンバハ家がロイテ (Reuthe) のカウア神父 (Pater Kauer) の仲介を得て、刺繍のための東インド製モスリンをフォラールベルクに送った。その直後にザンクトガレンでもゴンツェンバハ家のために刺繍がなされた。そもそもザンクトガレンにずっと以前に刺繍を導入したと一般にみなされているのは、当然のことだが確実である。」 (Winsauer 1965: 44)

ただし、ヴァインザウアが引用したヴァルトマンの文章を読むと、ヴァルトマン自身がゴンツェ

ンバハ家によるフォラルベルクへの刺繍織生産導入を史料で確認したわけではない。またロイテとはブレーゲンツァーヴァルト中部にある村であるが、その辺りの住民が刺繍を生産できるようになるためにはそれを誰かから、それも女性から教わらなければならないはずであり、教えるとすれば修道女であるとヴァルトマンは考えたものと思われる。というのは、上記の引用文に続けてヴァルトマンは、ロイテの近隣に女子修道院が存在していないし、存在したこともないと記しているからである (Winsauer 1965: 44)。

ヴィンザウアによる引用文の限りでヴァルトマンが確信をもって書いたことは、彼が活躍していた時代にまで続いているザンクトガレンとフォラルベルクとの間の結びつきは最初から存在していたことであり、ザンクトガレンの刺繍織は急速にその販路を拡大し、短期間のうちにザンクトガレンとその近隣地域でも、フォラルベルクと、ここからまもなくその仕事が伝わったドイツのシュヴァーベンでも、数多くの人々に仕事を与え、どこでも豊かな稼ぎをもたらした、ということである (Winsauer 1965: 44)。

以上のようなヴァルトマンの記述が正確か否か、ヴィンザウアは長年にわたって種々調べたが、確実なことを見出したわけではなかったと記している (Winsauer 1965: 45)。そもそもロイテのカウア神父がどこの修道院にいた人物なのかははっきりしないし、ゴンツェンバハ家はザンクトガレンではなく、そこから約15km北西に位置するハウプトヴィル (Hauptwil) に住んでいた富裕な商人であろうとヴィンザウアは推測している。それはドイツの著名な詩人ヘルダーリン (Hölderlin) がハウプトヴィルのゴンツェンバハ家で子弟の家庭教師を務めていた1801年

に、この商人のことを記録しているからである。それによれば、ゴンツェンバハはマルセイユ、リヨン、イタリア北部、ポルトガル、ペルーなどとの商取引を営んでいたので、これがヴァルトマンの記録した商人の子孫であると考えられるが、はっきりしない、と Winsauer (1965: 45) は記している。ちなみに、ハウプトヴィルはザンクトガレン州ではなくその北に隣接するトゥールガウ州 (Canton Thurgau) に位置する。スイスの刺繍織製造はザンクトガレン州だけでなくトゥールガウ州とアッペンツェル・インナーローデン (Appenzell Innerrhoden) とアウサーローデン (Ausserrhoden) でも盛んだった¹⁷⁾。

そして、刺繍織は簡単な仕事ではなく、誰かから教わらなくてはできないということを、そしてそれをブレーゲンツァーヴァルトの農家婦人あるいは少女に教えるために1763年に最初のスイス人女性がブレーゲンツァーヴァルトの小村シュヴァルツェンベルクに来たことを Winsauer (1965: 45) は記している。その根拠となる史料は、1818年の助任神父ヘルブルガーによるリングテナウ年代記 (Lingenauer Chronik des Kaplans J.B. Herburger) である、と Winsauer (1965: 45) は記している。リングテナウとはブレーゲンツァーヴァルト北部の村であり、前述のクルムバハから道路距離で約7 km 南に位置する。

Linder (1956: 12) もヴァルトマンの記述を引用して、フォラルベルクに刺繍織の仕事が導入されたのは1753年だったと述べている。しかし、ヴィンザウアが引用したヴァルトマンの文章よりもはるかに短く最初の数行だけでしかなく、かつ1ヵ所微妙な違いがある。それはゴンツェンバハ家とフォラルベルクの内職従事者とを仲介した神父の居住地である。ヴィンザウ

アが Reuthe と引用したのに対してリンダーは Reute と書いたのである。Reuthe がフォラールベルクのプレーゲンツァーヴァルトの小村であるのに対して、Reute はスイスのアッペンツェル・アウサーローデンの村である。これはフォラールベルクと近い位置にあり、この村の住民とフォラールベルクの住民との間に交流があった可能性はある。しかしスイス歴史レキシコン¹⁸⁾によれば Reute は宗教改革を受けてカトリックではなくエヴァンゲリシユ (evangelisch 即ちプロテスタント) の村になっていたので、18世紀にカトリックの神父が住んでいたとは考えられない。それゆえ、ヴァルトマンが言及したカウア神父が住んでいたのは Reuthe とするのが正しいであろう。

ちなみに Nägele (1947: 23) によれば、フォラールベルクにザンクトガレンの商人たちが刺繍織の仕事を持ち込んだのは18世紀半ばであり、間もなく数千人がその内職に従事するようになったとのことである。フェルガー (Fergger) がそのための材料と糸とをザンクトガレンに取りに行き、フォラールベルクの女性内職者の家にそれを持ち運び、完成した製品に対して賃織り代金を支払ったこと、農家婦人や少女が中心となって生産していた刺繍商品はネッカチーフ、テーブルクロス、前垂れなどだった。冬になれば農作業ができなくなるので男性もその仕事を行なったし、彼らはそれ以前に糸紡ぎの内職をしていた。1790年時点で東スイスとフォラールベルクを合計して約3万人から4万人が手作業での鎖編刺繍織内職に従事していた。ネーゲレはフォラールベルクと書いただけであり、その一部であるプレーゲンツァーヴァルトやその村々の名称に言及していない。また彼は記述の根拠を明示していないが、他の文献での記述と

矛盾したことが書かれているわけではない。

以上から、フォラールベルクに刺繍織という仕事が伝わったのは東スイスからであることは確実であるが、ザンクトガレン市あるいはザンクトガレン州からと断定できるわけではないし、その正確な年次がはっきりしているわけでもない。しかし18世紀半ば頃のことであると言える。そして、1760年代から刺繍織の仕事がプレーゲンツァーヴァルトの農家女性の内職として営まれるようになったことも確実である。刺繍織の仕事が最初に持ち込まれた場所は、東スイスとの位置関係からすればプレーゲンツァーヴァルトよりもライントール即ちアルペンライン川に近い村々と考えるのが妥当であろう。そのなかでザンクトガレン市やゴンツェンバハ家が住んでいたと考えられるトゥールガウにより近いのはボーデン湖に近いライントール北部であるが、ザンクトガレン州の中でのアルペンライン川沿岸部の平地やアッペンツェルとの位置関係からすればライントール中部の村にその仕事が早くに導入されたと考えることもできる。次節で述べるように、フォラールベルクの刺繍織工業はザンクトガレン州だけでなくアッペンツェルの商人あるいは製造業者とも関係していたからである。東スイスの4つのカントンの中ではザンクトガレンの経済力が高く、商業中心地がその州都であることは明白であり、それゆえザンクトガレンの商人たちが他のカントンの商人よりも多くの仕事をフォラールベルクの内職者に持ち込んだと考えられる。

2.5. 東スイス・フォラールベルク間の刺繍織加工貿易を仲介したフェルガー

前述したように、黒澤 (2002) はザンクトガレンの商人とフォラールベルクの農家とを仲介

した人物たちの総称としてフェルガーについて言及していた。他方、板倉（1975）は20世紀半ば頃に存在していた職業としてのフェルガーマイスター¹⁹⁾について述べている。フェルガーについて Weitenfelder（1999: 82-83）は、フォラールベルク州文書館（Landesarchiv Vorarlberg）に所蔵されているこの地域の統治に関わった役所である郡庁（Kreisamt）と邦裁判所（Landgericht）の19世紀前半期における記録を典拠として詳述している。それによれば、フェルガーとは東スイスの商人あるいは刺繍織製造業者（ファブリカント Fabrikant）²⁰⁾ から布地と刺繍のための糸とを受け取り、これをフォラールベルクの農家に届けて女性に刺繍をさせ、賃織り代金を支払って完成した製品を受け取り、これを東スイスの商人あるいはファブリカントに送り届ける役割を果たした人々のことを意味する。但し、フェルガーは自分自身の勘定即ち責任においてではなく、ファブリカントの使い走り（Bothe）として活動したに過ぎないとヴァイテンスフェルダは述べている。

他方、Winsauer（1965: 45）は、ブレーゲンツァーヴァルトのクルムバハで1825年から1837年まで主任司祭を務めたブレンドゥレ（Brändle）が書き残した年代記に依拠して、刺繍織に関して東スイスとフォラールベルクとを結びつけた最初のフェルガーはブレーゲンツに住んでいた人物だが、クルムバハ在住者が、直接ザンクトガレンやアッペンツェルの商家と取引する方が有利であることに気づくと自らフェルガーの仕事をするようになり、そうした人物がクルムバハだけで18名いた、と述べている。

ところで、Weitenfelder（1999: 82）には、前述の史料に依拠したフェルガーのスイス国境越えに関する記述がある。以下、その内容を紹介

する。スイスとオーストリアとの国境にある税関のひとつでボーデン湖に近いヘーヒスト（Höchst）を通るフェルガーはドルンビルンよりも北に位置するライントールの村々²¹⁾やブレーゲンツァーヴァルト北部の村々²²⁾の住人であり、賃織りに従事させる農家はフォルデラーヴァルト（vorderer Wald 即ちブレーゲンツァーヴァルト北部）に位置する村々の農家が通例だった。そのフェルガーの人数は約100名にのぼった。

ルステナウ近くのラインドルフ（Rheindorf）にある税関を通るフェルガーはブレーゲンツァーヴァルト北部の村々²³⁾の住人で、約30名にのぼった。ルステナウの税関を通るフェルガーは、ルステナウ、ホーエネムス、そしてヒンテラーヴァルト（hinterer Wald 即ちブレーゲンツァーヴァルト南部）の村々²⁴⁾の住人で約80名にのぼった。

つまり19世紀前半期のフェルガーは東スイスの商人やファブリカントと連絡を取りやすい地理的位置にあるライントール中部以北の村々かブレーゲンツァーヴァルトの村々の住人であり、彼らが仲介した手作業での刺繍織を行なう農家婦人や少女は彼ら自身が住んでいた村か近隣の村の居住者だった。

フェルガーがどの程度の頻度で東スイスとブレーゲンツァーヴァルトを往復移動したかについても Weitenfelder（1999: 81-82）は述べている。それはさまざまで、毎週1回であれば多い方であり、2カ月に1回という者もいた。また1回の往復移動で運ぶ刺繍織の材料を50～60束分とするフェルガーもいれば、10～15束分という者もいた。すべてのフェルガーが刺繍織を携えて各税関に現れるのは、月曜日朝と決まっていた。税関での検査に時間を要したので、場合によれば税関を通るのが当日の夕方になる者も

いた。税関を通過したフェルガーが完成した刺繍織を引き渡す相手はフォルダーアッペンツェル (vorder Appenzell 即ちボーデン湖とラインタールの両方を望むことのできるアッペンツェルの北部低山部分) の事業主であって、故郷の村々の農家婦人たちに支払う賃織り代金とフェルガー自身への手数料を受け取るのは火曜日の夕方か水曜日の朝であり、新たな刺繍織材料も携えてフォラルベルクの故郷の村に帰るのは水曜日から木曜日になった。その一方でアッペンツェルの刺繍織業者は水曜日にザンクトガレンの刺繍織市場に製品を持ち込んだ。こうしたフェルガーの行動に関する記録は1820年代のものである。フェルガーの移動リズムはオーストリアの関税政策の変更によって変わらざるを得なくなることもあった。また、ホーエネムスに住むフェルガーの中には、ルステナウの南に隣接するメーダー (Mäder) 村にある税関を通る者もいた。さらに、刺繍織に従事する農家婦人はラインタールやブレーゲンツァーヴァルトに限られたわけではなく、ドイツのバイエルンを経由するかまたは険しいアルプス山頂を経由しなければブレーゲンツァーヴァルトに到達できないクラインヴァルザータール (Kleinwalsertal) にもいた (Weitensfelder 1999: 81-82)。

多くのフェルガーは小規模で単なる運送人ではなかったが、1830年代になると大規模にその仕事を行なうとともに自身の工場を所有して刺繍織以外の繊維工業を営む者もいた。Weitensfelder (1999: 83) が提示した当時の大規模フェルガー 6 名の中には (表 1)、シュナイダー (Schneider)、フーセネガー (Fußenegger)、ローゼンタール (Rosenthal) の 3 名がフェルガーであると同時にファブリカントでもあったし、この 6 名が1839年においても活動しており、

しかも差配する農家婦人の人数が1834人に増えたこととヴァイテンスフェルダーは述べている。そのことは刺繍織に従事する農家婦人の人数が増えたか、またはフェルガー間の競争の進展の故に小規模フェルガーが淘汰されたか、またはその両方のプロセスが19世紀前半期に進んだことを意味する。

6 名の大規模フェルガーのうち、エンダーを除く 5 名はドルンビルン邦裁判所 (Landgericht Dornbirn) 管区内に居住していた。エンダーが住むメーダーはフェルトキルヒ邦裁判所管区内の村であるガルステナウに近い位置にある。また、こうした大規模フェルガーといえども、差配する農家婦人の人数は、綿織物工業分野で活動していた中継ぎ業者 (フェアレーガー Verleger) が差配する内職従事者数に比べれば少なかった。ただし、1820~30年代の記録によれば、刺繍織従事者は決して婦人に限られていたわけではなく、男性もいた。農家で刺繍織内職は繊維工場よりも国家経済にとって重要であるという認識を示した郡長 (Kreishauptmann 現在の Landehauptmann 即ち州首相に相当する職務) もいた。年間50万グルデンに相当する収入をもたらす年もあったし、1万5千人を超えるほどに刺繍織内職従事者がいたからである。以上のように Weitensfelder (1999: 83) は述べている。

1830年代には、それまでの粗織刺繍即ち鎖編刺繍 (Grob- oder Kettenstich-Stickerei) から精密織刺繍即ちプラットシュティッヒ刺繍 (Fein- bzw. Plattstich-Stickerei) へと刺繍織製品の高級化が進んだ。これを推進したのはザンクトガレンの商人たちだったが、フォラルベルクのヘーヒストでフェルガーとして活動していたカール・ヤーコプ・シュナイダー (Karl Jakob Schneider

表1の最初の人物)もこの高級品化に積極的に関わり、しかもティロール (Tirol) のレヒタール (Lechtal) の農家にまでその下請内職者を拡大した。この人物はフォラールベルク内での内職者も含めて約800人を差配するようになり、年間の合計で4万グルデンの賃加工代金を払うほどだった。(Weitensfelder 1999: 83)

フェルガーは徴税対象となる商工業 (Gewerbe) 従事者ではなく、その対象とならない請負自由業者だったが、フォラールベルクに駐在していたオーストリア帝国の徴税官は1846年にフェル

ガーを商工業従事者とみなし、営業税を徴収しようとした。これに対してフェルガーは抵抗したが、結果的に徴税の対象となった。それゆえに19世紀半ば頃にフェルガーとして働く人数に関する統計資料が残ることになった。これを整理した Weitensfelder (1999: 85) は、フェルトキルヒ地区庁管轄域内でのフェルガーの地理的分布を明らかにしている (表2、図1)。

言うまでもなく、フォラールベルクには他にブレーゲンツ地区庁とブルーデンツ地区庁があったはずであり、この表に示されているフェルガーの人数がすべてではない。しかし、1820～1830年代に比べればその人数は減少したと推定できるし、フェルガーの中には独立自営業者もいれば、その下請としてのフェルガーもおり、二極分解する傾向にあったと推定できる。

Winsauer (1965: 8) によればフェルガーという職業は刺繍織の分野だけに限定されていたわけではない。そもそも、綿紡績や綿織物が機械を用いる工場制工業として生産される以前の

表1 フォラールベルクで活動していた大規模フェルガー 1835年

氏名	居住地	差配している刺繍織従事農家婦人の人数
Schneider, Jakob	Höchst	326
Fitz, Xaver	Lustenau	213
Fußenegger, David	Dornbirn	203
Hofer, Johann	Lustenau	193
Ender, Gebhard	Mäder	137
Rosenthal, Urban	Hohenems	62
合計		1,134

出所：Weitensfelder (1999: 83)、原資料はフォラールベルク文書館所蔵の Kreisamt 記録文書。

注：ルステナウに住んでいたヨハン・ホーファーは、1860年代に刺繍織機械を導入したホーファー兄弟の一人ヨハンではない。他方、フーセネガーは商人であるとともにファブリカントでもあり、1860年代に邦議会議員も務めたことのある人物である (<https://vorarlberg.at/web/landtag/-/fussenegger-david-alt-gemeindevorsteher> 2025年7月6日閲覧)。1832年に綿布の生産と精製加工のための工場を立ち上げ、1835年にはフォラールベルクで3番目に従業員数が多い企業を経営した (<https://www.davidfussenegger.com/de/unternehmen/geschichte/> 2025年7月6日閲覧)。刺繍織のための仕上げ工程も担当し、現在でもドルンビルン市南端のヴァレンマート (Wallenmahd) に立地してアフリカンレースの生産に関わっていることを、工場外壁に掲げられていた非常に大きな幕絵によって筆者自身2023年5月に確認した。次のウェブサイトも参照 <https://firmen.wko.at/fussenegger-textil-veredelung-gmbh-textildrucker-textilveredler/vorarlberg/?firmaid=00eab684-c5f5-4416-8a5b-1114244cfe5d> 2025年7月6日閲覧。

表2 フェルトキルヒ地区庁管轄内でのフェルガーの地理的分布 1852年

ゲマインデ名	フェルガーの人数	下請フェルガーの人数	合計
Altach	5	3	8
Dornbirn	3	0	3
Gaißau	2	0	2
Götzis	4	0	4
Höchst	7	2	9
Koblach	2	2	4
Lustenau	11	1	12
Rankweil	2	4	6
Röthis	2	0	2
合計	38	12	50

出所：Weitensfelder (1999: 85)、原資料はフォラールベルク州立文書館所蔵のフェルトキルヒ地区庁文書。

注：当時のフェルトキルヒ地区の管轄範囲は現在のフェルトキルヒ県の管轄範囲と異なる。



図1 ライントール各地でのフェルガーの主要居住地（19世紀半ば頃）

筆者原図 大きな文字のイタリック体で記した地名がフェルガーの主要居住地。それ以外の場所は本文で言及した地名。各境界については Amt der Vorarlberger Landesregierung Abteilung Villa - Raumplanung und Baurecht (Hrsg.) Strukturdaten Vorarlberg 1994, S.9の図をもとにトレース。

1773年に、フォルールベルクの企業家がザンクトガレンの商人から木綿を入手し、これを内職者に渡して紡がせて綿糸にし、その綿糸をザンクトガレンの商人に引き渡すという仕事が行なわれるようになっていたとのことである。その企業家もフェルガーと呼ばれていた。1781年には綿糸から綿織物を生産する農家の内職仕事もフォルールベルクでなされるようになった。農家はフェルガーから綿糸を受け取り、これを織物にしてフェルガーに渡して加工賃を得たのである。1960年代当時のフォルールベルク最大の繊維企業ヘンメルレ (F.M. Hämmerle) の創業者フランツ・マルティーン・ヘンメルレ (Franz Martin Hämmerle) も1830年代にはフェルガーだった。当時、人口約7千人のドルンビルンに約600名のフェルガーがいたと Winsauer (1965: 8) は述べている。

Winsauer (1965) は、フェルガーの仕事を行なった人物の具体名を挙げてその具体的な活動を幾つかの頁で記述している。例えば、綿紡績・織物のためではなく、刺繍織のためのフェルガーの先駆者の一人は、アルタハ (Altach) 村出身のオットー・エンダー博士 (Dr. Otto Ender) の父親であるとのことである (Winsauer 1965: 13)。オットー・エンダーとはフォルールベルク州の首相を1918年から1930年まで務めた後に直ちにオーストリア首相となり、1931年から1934年まで再度州首相となった人物である。その母方の曾祖父や父方の祖父は村長を務めた人物なので、エンダーは村レベルでの政治エリートの家系に属すると Land Vorarlberg (2005: 224-225) で紹介されている。表1にある Gebhard Ender とはオットー・エンダーの縁戚と思われる。

ついでながら、1923年にヴィンザウアがドルンビルンの刺繍織専門学校の校長に就いたのは

オットー・エンダーの引きによるものだったと Winsauer (1965: 13) 自身が述べている。つまり、ヴィンザウアはエンダー家のことを聞き知っていたと推定されるし、村レベルでの政治的エリートの家系にある人物が就く職業の1つとしてフェルガーがあったということになる。表1にあるフーセネガーもドルンビルンの名望家であったことは確かである。

Winsauer (1965: 15-16) はフェルガーとして活動したことのあるレーオボルト・ビショフ (Leopold Bischof) についても言及している。この人物は1870年にグロースヴァルザータール (Großes Walsertal) の最奥地にあり現在はブレーゲンツァーヴァルトに属するダミュルス (Damüls) 村で生まれ、刺繍織をしていた母親を助けてダミュルスとブレーゲンツァーヴァルトのアウ (Au) 村とを往復移動してその資材と製品を運んだ。彼は24歳の時にベーツァウ (Bezau) 村でフェルガーとして活動し、ザンクトガレンの商人とブレーゲンツァーヴァルトの農家婦人とを仲介した。1905年には自身の才覚でオーストリア・ハンガリー市場に刺繍織を販売するようになり、その後アメリカ市場を開拓した。さらに1929年に彼はアウ村で刺繍織専門学校を開設し、99名の女子に Ausschnieden (剪定) の訓練を施した。彼は1950年に亡くなり、後継者の息子2人も1950年代に相次いで亡くなったので、その事業はなくなった。

ヴィンザウアによる具体的な記述から、フェルガーの中には企業家精神にあふれる者がいたし、村の中で名望家に属する者がいたと分かる。彼らは東スイスの商人やファブリカントから刺繍織のための資材を受け取る際には、何をどれだけ受け取り、それらがどれだけの価格になるのかを記録できたはずである。その記録に基づい

て農家婦人に刺繍織の材料を渡す際には、各農家に何をどれだけ渡したかということも記録したはずである。つまり、文字を書く能力と数字を扱う能力とを兼ね備えていたと考えられる。そして Weitenfelder (1999: 81-82) から分かるように、農家婦人から完成した商品を受け取る際には賃織り代金をオーストリアの貨幣で支払ったが、それに相当するスイスフランを東スイスの輸出商人やファブリカントから事前に受け取っていたのではなく、賃織りされた商品を引き渡す際にそれを得たのである。こうしたやり取りを行なうことができる能力は単に識字能力や数字を扱う能力だけでなく、ある程度の資金を自分自身でまねもって用意できるだけの資産があったということの意味する。しかも、賃織りされた刺繍織物の検品能力も持っていたはずである。その意味でライントールやブレーゲンツァーヴァルトの村々のほとんどにいたフェルガーは、各村の中では教育水準が相対的に高く、企業家精神を持ち合わせていたと判断できる。それゆえ、フェルガーはいつまでもフェルガーであり続けるのではなく、フランツ・マルティーン・ヘンメルレヤダヴィド・フーセネガーのようにそこから脱却して真の意味での繊維商品の生産と販売を行なう企業を設立する人物が現れたのは不思議なことではないし、フォラルベルクという地域の経済発展がそのような企業家の出現に拠っていたことを認識できる。

ルステナウ刺繍織100年史の小冊子でも、フェルガーとして活動していた者18名の名前を挙げ、そのうちの何人かは後にホーファー兄弟と同様に自身の輸出企業を設立したと述べている (Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie 1968: 6)²⁵⁾。また、そこに挙げられたフェルガーの中にはゴットフリート (Gottfried) とルーペ

ルト (Rupert) というホーファー (Hofer) 兄弟も含まれている。この2人を、あるいは特にルーペルトを Heinzle (2008: 44, 55, 57, 63, 68, 74) は、ルステナウ歴史文書館に保存されている史料に基づいてたびたび言及している。これの63頁目でその2人の兄弟がフェルガーでありファブリカントでもあったと記している。実はルーペルト・ホーファーは現在のルステナウにおける刺繍織・レース製造企業として最大の Hofer Hecht Stickereien の創業者である。この企業のホームページには同社の歴史に関するウェブサイト²⁶⁾があり、これによるとルーペルト・ホーファーは、後述するフォラルベルクの機械刺繍織のパイオニアであるヨーゼフ (Josef) とヨハン (Johann) のホーファー兄弟の弟であり、フェルガーとしての事業を起こすことを1880年に許可され、東スイスの輸出業者による賃織り注文をフォラルベルクに仲介した。また彼はヘヒト (Hecht カワカマスという意味) という飲食店を経営するとともに農業にも従事した。Heinzle (2008: 55) はルステナウ歴史文書館に保存されているこの町の家族名簿 (Familienbuch) に基づいて、ルーペルトがマルクス・ズィティクス・ケーニヒ (Markus Sittikus König) というヘヒト亭主人 (Hechtwirt) としてガストハウス (Gasthaus) 即ち飲食店を経営するとともに農業にも従事していた人物の娘と結婚し、岳父の事業に参画したと述べている。ケーニヒは1879年に記録されたルステナウにおける刺繍織機械の所有者名簿に4台の手動刺繍機 (Handstickmaschinen) を所有していたことも Heinzle (2008: 55) は記している。

上の事実からも、フェルガーとして活動できた人物は、村の中での農業だけでなく飲食店も経営できる中産階級に属していたことが分かる。

なお、ドイツ語圏でガストハウスとは飲食店であると同時に旅館でもあるのが一般的であり、その建物の中に経営者家族の居室もある。それ故通常の居宅用家屋に比べて規模が大きい。ルステナウで1879年に手動刺繍織機械を3台以上所有していた人物を、ルステナウ歴史文書館に保存されている「刺繍織機械所有者名簿 (Verzeichnisse der Sticomaschinenbesitzer)」と「家族名簿 (Familienbuch)」とに基づいて調査した Heinzle (2018: 40-52) によれば、この町の相対的に規模の大きなファブリカントは往々にして飲食店経営者であり、また相互に縁戚関係にある者が多かった。

ついでながら手作業での刺繍織がなされていた時代であっても、ザンクトガレン商人への依存から脱しようとする動きが既にあったと Winsauer (1965: 14-15) は述べている。これによれば、ヘーヒスト村村長カール・シュナイダー (Karl Schneider) (1800-1868) がその動きに関わっていた。この人物が設立した企業か否か明記されていないが、J.C. Schneider あるいは I.C. Schneider というヘーヒストの刺繍織企業が、ウィーンで刺繍織を1839年に独自に販売したという記録が複数あるとのことである。ヴィンザウアがそう述べるにあたって依拠したのは Tiefenthaler (1950) がまとめたヨハン・ネポムク・エーブナー (Johann Nepomuk Ebner) による記録である。この人物は1830年代にフォラールベルク郡長を務めた。しかし、彼が残した記録によると、スイスからアメリカへの刺繍織物の輸出が1830年代に落ち込み、その影響をフォラールベルクの刺繍織業者が受けた。このエーブナーの記録に依拠して Winsauer (1965: 56) は述べているのである。

3. 刺繍織・レースの機械生産化

3.1. 鎖編刺繍機の導入

機械を用いての刺繍織・レース工業がフォラールベルクで始まったのは19世紀後半に入ってからである。Weitensfelder (1999: 85) によれば、鎖編刺繍機、別名パリ式機械 (Kettenstich-Stickmaschinen または Pariser Maschinen) この機械は現在チェーンステッチ刺繍機と和訳されていることが Google のサーチエンジンで検索すると判明する) がこの地域に登場したのは1865年である。この機械を用いると手作業での刺繍織職人3名分の能力を発揮したが、量産用というほどではなかった。それを設置したのは手作業での刺繍織にもともと従事していた世帯であろう。

Nägele (1947: 23-24) も鎖編刺繍機のフォラールベルクへの導入は1865年だったこと、そしてこれが急速に普及し、フォラールベルク全体で3千台を超えるほどになったと述べている。Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 184) によれば、その機械は1880年に1232台存在し、1900年には3646台とピークに達した。手作業だけで刺繍する女性 (Handstickerinnen) も含めて、当時4288人が刺繍織に従事していたという。

また Nägele (1947: 23-24) は、1880年時点でザンクトガレンの輸出商が下請内職者に支払った賃織り代金は約200万フランに上ったが、その過半はフォラールベルクの内職者に支払われ、残りの半分弱の内の3分の2がスイス内での内職者、3分の1が南西ドイツでの内職者に支払われたとのことである。南西ドイツではシュヴァーベンだけでなくシュヴァルツヴァルトにも及んだことも記されている。ネーゲレは、フォ

ラールベルクで鎖編刺繍機を用いて生産された商品のほとんどがザンクトガレンの輸出商の下請けによるものだったことを述べているが、1940年時点でも250～300名の下請内職者がおり、その生産物のほとんどがカーテンで、その一部は従前と同様にザンクトガレンの輸出商の下請けだったが、スイス以外の外国に直接販売された商品もあると記している。

3.2. 手動刺繍機械の導入

その鎖編刺繍機のフォラールベルクへの導入の2年後、即ち1867年にはプラットシュティツヒ刺繍機 (Plattstichstickmaschinen) 即ち手動刺繍機械 (Handstickmaschinen) がこの地域にも導入されたと Weitenfelder (1999: 85) は述べている。この機械は幅6メートル、高さ2メートルにも及ぶ大きなもので1台に312本の針が装備され、手作業での刺繍織職人30～50名分の能力を発揮した。そして Weitenfelder (1999: 85) は、1869年3月28日にヨーゼフ・ホーファーが手動刺繍機械をルステナウで設置したと述べ、その典拠として Ebenhoch (1993) を参照指示するとともに、刺繍織機械の導入年については Vorarlberger Volksblatt (5.4.1894) に拠っていることも注記している。Ebenhoch (1993) が何を根拠として1869年という年次を特定したのか分からないが、Weitenfelder (1999: 85) の注記に従うならば、ルステナウでの刺繍織機械の導入後約30年たってからの地元新聞の記述が典拠であると言わざるを得ない。約30年前のことに関する新聞での記述が信頼できるかどうか、これに関する史料批判をヴァイテンスフェルダーがしたかどうか分からない。さらに言えば、1867年に導入された機械とヨーゼフ・ホーファーがルステナウで1869年に設置した機械とが同種類

のものかどうか、Weitenfelder (1999: 85) の記述では判然としないし、1867年の導入がフォラールベルク州内のどこで誰によってなのか、明記されていない。

しかし、Heinzle (2018: 37) は Weitenfelder (1999: 85) の記述を根拠として、ルステナウでの刺繍織機械生産が開始されたのは1869年であると断定している。後で述べるように、フォラールベルクにおける機械での刺繍織の牙城 (Hochburg) 即ち中心地となるルステナウでの刺繍織機械の導入はヨーゼフ・ホーファーによっていたことは確実であり、これがフォラールベルクでの刺繍織工業の機械化の最初である、とほかの文献すべてにおいて述べられている。例えば、Nägele (1947: 24-25) も、次のように1869年説を述べている。ただし、その根拠は明示されていない。

「スイスやフォラールベルクの刺繍について語る際に、鎖編刺繍のことを思い浮かべなくなってからずいぶん年月がたっている。それは手動刺繍機械 (Handstickmaschine) の生産物によって全く後景に退けられてしまっている。手動刺繍機械と呼ぶのは、これが右手によって駆動されるからである。フォラールベルクでは、手動刺繍機械もまた主として家内工業 (Hausindustrie) で用いられている。その最初の機械が1869年にフォラールベルクにやってきた。東スイスでは既に1875年に15,000人を超える労働者が刺繍織に従事している。この工業でも、1世紀前に鎖編刺繍でなされていたことが繰り返された。つまりザンクトガレンの商人が、刺繍のための材料をフォラールベルクに喜んで送るほどにたくさんの注文を時折出した。景気のよい時には刺繍織を生産する人たちはその賃金に満足できたので、たくさんの場所で手動刺繍機械が設置された。1876年に初めて187台が数えられた一方で、1880年には既に1404台に

なった。つまり7倍を超えたのである。」(Nägele 1947: 24-25)

しかし、景気が悪くなり、スイスからの刺繍織の輸出が減少すると、まずフォラルベルクのローンシュティッカーがそのあおりをくらい、設置された刺繍機械は休機となり、ローンシュティッカーの人数も減少した、と Nägele (1947: 25) は述べ、次のように続けている。

「約30年間にわたってフォラルベルクのローンシュティッカーはザンクトガレンに完全に依存していた。フォラルベルクの刺繍業者は賃織りした製品をスイスに供給した。その際に企業家利益はもっぱらザンクトガレンの人たちのものとなった。当地の労働者は外国の雇用主の意図に完全に依存していた。刺繍輸出が落ち込むと、まずフォラルベルクの刺繍織業者がその仕事を失った。市場に供給するのに東スイスの機械だけで十分だったからである。」

しかし、ルステナウで手動刺繍機械が導入されたのは1868年だったと、Land Vorarlberg (2005: 162) に記されている。Winsauer (1968: 8) もまた、ルステナウのヨーゼフとヨハンのホーファー兄弟2人によって、フォラルベルクで最初の手動刺繍機械が1868年に設置されて稼働したと述べている。その根拠として Winsauer (1968: 9) は1883年のルステナウの教会年代記を挙げて、その文章を、孫引きの形で引用している。教会年代記の文章を記したのは Hannes Grabher “Unser Brauchtum” 1956 である、ということが Winsauer (1968: 9, 21) の注記6) で明示されている。そこには、手動刺繍機械の導入によって経済的に成功した様子を見て、ルステナウの他の人たちもそれを購入して刺繍

織工業に参入したが、機械の価格は極めて高かったので借金して購入し、2年間かけて返済するのが通例だったこと、そして刺繍織が世界的にブームだった時期はよいが常にそうだというわけではなく、不況になるとこれが数年続き、刺繍織企業がそれに耐えられなくなったという趣旨のことが年代記に記録されたという。

Winsauer (1968: 9) によれば、ヨーゼフ・ホーファーは手動刺繍機械を設置する前に、スイスのアルトシュテッテン (Altstätten)²⁷⁾ で刺繍職人のマイスターであるカール・クリングラー (Karl Klingler) のもとで徒弟 (Lehre) として2年間修業した。それによって刺繍の文様の設計 (Musterzeichnen)、これの手動刺繍機械への転写拡大 (Vergrößern)、自身の力で刺繍織生産企業を起こすために必要なその他すべてを学んだという。ヨーゼフは、1870年に弟で商業活動に従事していたヨハンの助力を得て、自身が作成した文様で生産した刺繍織をザンクトガレンの市場に出品した。また、その成功に刺激を受けて手動刺繍機械を導入した他者に対して、受注した生産の一部を分けたという。そしてヨーゼフとヨハンの兄弟は、1891年に Firma J.J. Hofer & Bösch という名称の企業を設立した。これは後に Hofer, Bösch & Co. という名称に変わった (写真1)。これはウィーンに支店を置いたフォラルベルク最初の刺繍織企業であるという。ウィーンに支店を置いたということは、ザンクトガレンの商人に依存するのではなく、自身の営業努力によってオーストリア・ハンガリー二重帝国内、さらには帝国外に市場を開拓しようとしたことを意味する、と Winsauer (1968: 9) は述べている。Heinzle (2018: 60) も、1892年12月5日に発行された地元新聞 *Vorarlberger Landes-Zeitung* の記事を直接引用して、Firma J.J.



写真1 ルステナウのかつての刺繍織工場 (Hofer, Bösch & Co.) 建物
2019年9月10日筆者撮影。

Hofer & Bösch が Vereinigte Stickerei-Fabriken Lustenau, Hofer, Bösch & Co. と名称を変えたこと、その支店がウィーンにあったと述べている。ちなみに Heinzle (2018: 43-44) によれば、Böschとはヨーゼフ・ホーファーの岳父ヨハン・ゲーブハルト・ベッシュ (Johann Gebhard Bösch) のことである。彼はリンデン (Linden) という名前の飲食店を経営しており、既に1879年に10台の手動刺繍機械を所有していた。

他方で、Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 184-185) はヨーゼフとヨハンのホーファー兄弟が1867年に手動刺繍機械2台を設置して生産を開始したのがフォラルベルクでの最初の機械による Plattstichstickerei (プラットシュティツヒ刺繍織) である、と1869年とは異なる年次を記している。しかし、手動刺繍機械1台に312本の針が装備されているので、これ1台で312人分の刺繍織ができる、とヴァイテンスフエルダーの記述と同じことが述べられている。

したがって、刺繍織を量産できる手動刺繍機械がフォラルベルクにいつ導入されたのか、

という点について3説あることになる。そのいずれが正しいのか判断することはできない。根拠を挙げているのは1868年説と1869年説の2つであるが、どちらも同時期の記録文書に拠っているのではなく、それから20年以上の時を隔ててからの史料に基づいており、それらの史料が何を根拠としていたのか不明である。

しかし、1860年代末にルステナウのホーファー兄弟が、あるいは少なくとも兄のヨーゼフが手動刺繍機械をフォラルベルクで初めて設置して生産を開始したことはほぼ確実である。彼らは当初ローンシュティッカーだったが (Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie 1968: 6)、1890年代初めにはザンクトガレンの商人から独立して自ら市場をオーストリア・ハンガリー帝国内に求めようとしていたこともほぼ確実である。

ルステナウの刺繍織・レース工業100周年記念誌には、かつてここでも農業のかたわら、綿織物の内職仕事が農家家屋の地下室で行なわれていたが、ジャカード機での綿織物の量産がフォラルベルクでなされるようになるとその綿織

物内職仕事がなくなったこと、その後布地に Spachtelstickerei という簡単な刺繍を施す内職仕事は女性によって営まれていたがこれも衰退していたこと、そういう時期に刺繍織機械工業が ルステナウに導入されたと記されている (Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie 1968: 5)。

それはともかくとして、ホーファー兄弟による事業の成功を間近に見て手動刺繍機械を設置してこの産業に参入する人たちが急増した。Winsauer (1965: 63-65) は19世紀末及び20世紀初め時点でのゲマインデ別の手動機械設置台数を表の形でまとめている (表3、図2)。残念ながら、ヴァインザウアはその統計データの出所を明示していない。しかし前述した彼の経歴の故に、この表に示されている数値はほぼ正しいと思われる。Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 185) には機械の種類ごとにフォラルベルク全体での刺繍織のための機械台数に関する表が掲げられており、その出所を Mühlwerth (1941) とするとともに、補足的に Winsauer にも拠ったと注記し、手動刺繍機械設置台数が1880年の1404台、1890年の3141台、そしてピークを記録した1900年の4032台へと増えたことが記されている。

1887年には州の中で20以上のゲマインデを合計して2565台の手動刺繍機械が設置されており、その中でルステナウが約25%、ゲッツイスが約11%、ホーエネムスが約10%、ドルンビルンが約7%、アルタハが約6%、ヘーヒストが約5%を占め、この6カ所で全体の60%を越えていた (表3)。これらのゲマインデはいずれもラインタールの北部から中部にかけての平野部に位置している。1908年になるとアルペンライン川から遠く離れたブレーゲンツァーヴァルト、ヴァール

ガウ (Walgau)、モンタフォン (Montafon) に位置するゲマインデも含めて数多くのゲマインデに手動刺繍機械が設置されるようになった。その合計はピーク時に比べて減ったが3322台に上った。ただし上記の6ゲマインデについてみると、ドルンビルンやアルタハのように設置台数が減少した場合と、ホーエネムスやゲッツイスのように大きく増えた場合に分かれる。最多設置台数を誇っていたルステナウは若干の減少をみたが、依然として最多数の手動刺繍機械が設置されており、全体の約18%を占めた。ゲッツイスの西に位置してアルペンライン川に面するメーダーやコープラハ (Koblach) での設置台数が大きく増加していずれも100台以上となったので、ゲッツイスも含めてラインタール中部での設置台数の方がルステナウ単独での設置台数を上回ったことになる。

3.3. シフリ刺繍機械の導入

1926年になると手動刺繍機械の設置台数は大きく減少した。それは、この機械に比べて680～1020針を装備して生産性を大きく伸ばすシフリ刺繍機械 (Schifflistickmaschine または Schiffchenstickmaschine) が1900年頃から手動刺繍機械に取って代わるようになったからである (Winsauer 1965: 22)。19世紀末から20世紀初めにかけてなされた刺繍織機械の高度化を解説した Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 185) によれば、シフリ刺繍機械 (Schiffchenstickmaschine) はザンクトガレン州のイザーク・グレブリ (Isaak Gröbli) が1875年に開発した機械である。その12年後の1887年にドイツのザクセン王国の都市プラウエン (Plauen) の機械企業 J.H. & C. Dietrich がモーターで稼働する刺繍織機械を開発した。1898年

表3 19世紀末と20世紀初めのフォラルベルクにおける手動刺繍機械設置台数の地理的分布

ゲマインデ名	1887年	1908年	1926年	伝統的広域の地理的名称・位置
Alberschwende			1	ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Altach	149	41	16	ライントール・平野部中部
Andelsbuch	21	15		ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Au		10		ブレーゲンツァーヴァルト・南部
Batschuns-Zwischenwasser		42	4	ライントール・平野部南部
Bezau	25	12	2	ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Bizau		13	2	ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Bildstein		21	8	ライントール・山地斜面部北部
Bludesch		9		ヴァールガウ・平野部
Braz		40	5	クロースタール
Bregenz		19		ライントール・平野部北部
Dalaas		3		クロースタール
Doren	39	30		ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Dornbirn	170	107	11	ライントール・平野部中部
Düns		19		ヴァールガウ・山地斜面部
Egg	56	39	1	ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Feldkirch-Altenstadt	52	37		ライントール・平野部南部
Feldkirch-Gisingen		22		ライントール・平野部南部
Frastanz	52	30	5	ヴァールガウ・平野部
Fraxen		31	11	ライントール・山地斜面部南部
Fußbach		44	18	ライントール・平野部北部
Göfis	39	91	14	ライントール・山地斜面部南部
Götzis	290	490	147	ライントール・平野部中部
Hard	82	41	1	ライントール・平野部北部
Hittisau		9		ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Hohenems	251	501	40	ライントール・平野部中部
Höchst	123	147	38	ライントール・平野部北部
Hörbranz				ライブラハタール
Röns		13	1	ヴァールガウ・山地斜面部
Kennelbach		12		ライントール・平野部北部
Klaus		17	6	ライントール・平野部南部
Koblach	82	137	46	ライントール・平野部南部
Krumbach		12	1	ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Langenegg		8		ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Lauterach	24	5		ライントール・平野部北部
Lochau		2		ライブラハタール
Lingenau		31		ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Ludesch	19	12		ヴァールガウ・平野部
Lustenau	646	603	70	ライントール・平野部中部
Mäder	62	104	52	ライントール・平野部中部
Meiningen		13		ライントール・平野部南部
Mellau		16		ブレーゲンツァーヴァルト・南部
Nenzing		88	1	ヴァールガウ・平野部
Raggal				グローセスヴァルザータール
Rankweil	45	42	2	ライントール・平野部南部
Reuthe		14	2	ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Satteins	74	79		ヴァールガウ・平野部
Schlins		17	1	ヴァールガウ・平野部
Schnepfau		5		ブレーゲンツァーヴァルト・南部
Schnifis		17	1	ヴァールガウ・山地斜面部
Schoppernau		7		ブレーゲンツァーヴァルト・南部
Schruns		2		モンタフォン
Silbertal				モンタフォン
St. Anton		2		モンタフォン
Sulzberg		31	4	ブレーゲンツァーヴァルト・北部
Sulz-Rötis-Weiler	119	71	11	ライントール・平野部南部
Schwarzenberg		12	3	ブレーゲンツァーヴァルト・中部
Thüringen		2		ヴァールガウ・平野部
Thüringerberg				グローセスヴァルザータール
Übersaxen		18	1	ライントール・山地斜面部
Vandans		5		モンタフォン
Viktorsberg		11		ライントール・山地斜面部南部
Wolfurt-Schwarzach	124	51	2	ライントール・平野部北部
合計	2,565	3,322	528	

出所：Winsauer (1965: 63-65)。

注：数値未記入の村では1958年に設置が確認された。1926年の合計値は、出所文献では513と記されている。



図2 1908年時点で手動刺繍織機械が設置されていたゲマインデ

資料：Winsauer (1965: 63-65) に基づき筆者作成。

注：ゲマインデ名の後に記した数値が設置台数。50台未満のゲマインデの文字は小さいが、50台以上であれば文字を大きくしてある。Röthisの71は北と南に隣接する Weiler と Sulz を含めた数値。Rönsの設置台数は13。

にはスイス・トゥールガウ州アルボン (Arbon) に立地するザウラー (Saurer) 社が長さ 6 ヤードのシフリ刺繍機械を、1905年には10ヤードの機械を開発した。シフリ刺繍機械には2種類あり、手で操作するパントグラフ刺繍機械 (Pantographstickmaschine) と、動力を用いて自動で動く機械アウトマーテン (Automaten) とがある。パントグラフ刺繍機械であっても手動刺繍機械の3倍の生産能力を持っていた。パントグラフ刺繍機械は刺繍の文様を描いた設計図から布地にそれを手動で転写するのに対して、アウトマーテンは綿織物におけるジャカード機と同様にパンチカードと電力による自動機である。当初はパントグラフ刺繍機械が普及したが、後にアウトマーテンに取って代わられるようになった。ただし、大量生産のためにはアウトマーテンがよいが、繊細な刺繍織には手動刺繍機械やパントグラフが優れていたため、この2種類の機械の使用がなくなったわけではない。アウトマーテンはブラウエンで生産されたものがより多く、パントグラフはスイスのザウラー社製がより多く使われた。(Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 185)。

刺繍機械が導入されてから、フォラルベルクの中ではブレーゲンツァーヴァルトよりもライントールでの刺繍織生産が増加した。既にみたように特にルステナウでの生産が多くなり、これは貧しい農村から豊かな町に変貌した。その他の刺繍織生産で重要なゲマインデはアルタハ、ホーエネムス、ゲッツィス、ドルンビルンだったし、1950年時点でもそうだった (Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 186)。

Winsauer (1968: 12) によれば、機械動力で動くシフリ刺繍機械をフォラルベルクで最初に

導入したのは Firma Ed. Alge & Co. であり、1896/97年のことだった。ほどなくして Hofer, Bösch & Co. もそれを導入した。Firma Ed. Alge & Co. とは、ルステナウで教師を務めかつ村の Vorsteher (フォーアシュテア即ち村長) も務めたエドゥアルト・アルゲ (Eduard Alge) が設立した企業のことである。グラーツ工科大学が開設している Austria Forum というホームページ²⁸⁾ によれば、1892年に die Firma Eduard und Josef Alge が設立されたという。これはフェルガーとして活動していたヨーゼフ・アルゲ (Josef Alge) ほかがエドゥアルト・アルゲとともに設立した刺繍織企業であり、後にシュティッケライ・ユニオン (Stickerei Union) と名前を変えて、石油動力で動く5ヤードの長さを持つシフリ刺繍機械10台を1897年にフォラルベルクで最初に設置した工場だとのことである。

Winsauer (1968: 13) によれば、レングレ・ヴェーバー (Längle-Weber) によるアルタハ村の年代記に依拠して、シフリ刺繍機械は購入価格が高だけでなく大型のために、これを設置するのに納屋のような建物では不十分なので新たに建物を建てたり、家畜小屋を改造したり、手動刺繍機械を設置していた小屋を拡張したりしなければならず、そのために費用が嵩んだという。景気の良い時にはよかったが、景気が悪くなると機械を強制競売に付さざるを得なくなることもあったという。

3.4. フォラルベルク最大の刺繍織企業

Heinzle (2018: 63) によれば、ホーファー兄弟がベツシュの資本も得て設立した刺繍織企業は、1898年に Hofer, Fitz & Cie と名称を変えた。この会社を設立するために出資した人物にはホーファー兄弟2人のほかに、彼らの弟ルーベルト

とゴットフリート、ローベルト・ベッシュ (Robert Bösch) など9名、合計11名いた。その全員がファブリカントだった。その中には、ホーファー兄弟と従兄弟の関係にあるフィッツ (Fitz) 兄弟がいたし、ルステナウが市場町に昇格する直前の村長を務めていたエデュアルト・ヘンメルレ (Eduard Hämmerle) もいた。この人物はフィッツ兄弟の姉妹の配偶者である。ローベルトとゴットフリートのホーファー家末弟2人は前述したようにともにフェルガー兼ファブリカントだったし、ほかにもフェルガー兼ファブリカントの人物が1名いた。また、11名のうち2名はウィーンに居を置き、商業活動に従事していた。ハインツレがこうした情報を得たのは、Vorarlberger Landeszeitung (18.10.1899) に掲載された記事であることが注で明記されている (Heinzle 2018: 78)。各人の縁戚関係についてはルステナウ歴史史料館に保存されている「家族名簿」に基づいている。

ヨーゼフ・ホーファーは1913年5月に死去し

た。その死亡広告記事 (Vorarlberger Volksblatt 18.5.1913) を Heinzle (2018: 70) は引用している。これによれば、ホーファーの企業で雇用されている約500名が葬儀に参列したという。彼の企業は当時、アルペンライン川右岸に立地する刺繍織企業の中で最大の輸出企業だったという。Heinzle (2018: 65-70) には、20世紀初めにルステナウに建築ブームが起き、規模の大きな刺繍織工場だけでなく、アルルベルク山塊の東に位置するオーストリア帝国内から女工を雇用するための寄宿寮が建設されたし、ヨーゼフの子のヨハン (Johann) が豪華なヴィラハウス (写真2) を建てさせたことなども述べられている。

3.5. 国立刺繍織専門学校の設立

ヴィンザウアがドルンビルンに設立された国立刺繍織専門学校の教員として採用され、かつ後に長年にわたって校長を務めたことは前述した。彼自身がこの学校について詳しく述べているので (Winsauer 1968: 11)。その内容を紹介する。



写真2 ルステナウの刺繍織ファブリカント、ホーファー家のヴィラハウス
2019年9月10日筆者撮影。

1887年10月に刺繍織業者がドルンビルンに集結し、k.k. Fachschule für Stickerei（刺繍織のための帝国専門学校）の設立を帝国に請願すると決議した。それは、ますます盛んになる刺繍織生産で働く人たちの刺繍織に関する理論的知識と実践的スキルを高めるためである。それによって、フォラールベルク製刺繍織物の品質を高めることが期待された。この請願は受け入れられ、1889年8月26日にその設立が認可された。

Winsauer (1965: 16-19)によれば、1890年にドルンビルンで開設された国立刺繍織専門学校の校長は1923年までスイス人が担った。校長だけでなく、最初の刺繍織教師はスイス人だった。他方、ルステナウには、刺繍織製品を世界各地に輸出するための営業員を育成するための商業学校（Handelsschule）が1903年に設立された。そこでは商業教育だけでなく、外国語教育も重視された。市場となる国の現地語で商取引交渉をできるだけの人材育成を目指したからである。

国立刺繍織専門学校を、既に最大の刺繍織工業の場所となっていたルステナウにではなく、ドルンビルンに設立したのは、この都市が既に繊維工業全体のフォラールベルクにおける最有力工業都市となっていたからであり、手動刺繍機械での刺繍織業者がファブリカントだけでなくローンシュティッカーも含めれば、ドルンビルンにはもちろんホーエネムスやゲッツイスにも多数いたからであろう。この2つの町としてのゲマインデからドルンビルンには鉄道で容易に往復できたのである。これに対して商業学校がルステナウに設立されたのは、この町に輸出市場を外国に開拓しようとするファブリカントが他のゲマインデよりも多くいたことが背景にあると推測できる。実際にはアルヴィン・ハウザー（Alwin Hauser）という人物が州都ブレー

ゲンツで1877年に創設した商業学校が1902年に閉校を余儀なくされ、ルステナウに新しい商業学校設立を願い出たところ、当時町となったばかりの町長を務めていた前述のエデュアルト・ヘンメルレのリーダーシップの下で町議会がその設立を決議し、町立商業学校として開設された²⁹⁾。

4. 20世紀前半期の動向と不況期における政府の政策

フォラールベルクで設立された手動刺繍機械を所有する企業の中には、ヨーゼフ・ホーファーが弟のヨハンや岳父のベッシュとともに設立した企業のように、ザンクトガレン商人から独立して独自の販売ルートも確保して大企業化したものもあるが、多くの刺繍織企業は20世紀初めまで、東スイスの輸出商やファブリカントから材料を支給されて賃織りに従事するローンシュティッカーだったことは間違いない。その様子をまずNägele (1947)に依拠して描く。

19世紀から20世紀の転換期の頃にシュティツケライという表現でイメージされたのは、もはや農家婦人の内職での鎖編刺繍ではなく、手動刺繍機械という大型機械を用いて量産する仕事になった。何故手動刺繍機械と名づけられたかと言えば、その機械の駆動は、通常男性の右手での操作によったからである。大型機械を複数台設置してファブリカントと呼ばれるようになった者もいれば、1台のみを設置して家内工業生産するローンシュティッカーもいた。いずれにせよ、まずはザンクトガレンの輸出商あるいはファブリカントの下請として刺繍織を生産した。フォラールベルクでは、まずは家内工業のための機械としてそれが導入され、刺繍材料

の糸はザンクトガレンのファブリカントあるいは輸出商から支給された。手動刺繍機械は急速にフォラルベルクでも普及したが、ザンクトガレンからの世界各国への輸出が落ち込むと、まずフォラルベルクのローンシュティッカーへの発注が削減され、スイス側のローンシュティッカーへの発注を維持する政策が取られた。つまり、フォラルベルクのローンシュティッカーはザンクトガレンの輸出商にとっての景気の調整弁として、これに依存する構造だった。(Nägele 1947: 24-25)。

シフリ刺繍機械がフォラルベルクに導入されたのは1880年である。この機械はまず東スイスでの普及が進み、1890年の542台、第1次世界大戦直前で4,936台、1916年に5,908台へと増えた。他方、手動刺繍機械は1890年時点において東スイスで18,000台、フォラルベルクでは3,000台に過ぎなかった(Nägele 1947: 25)。つまり、19世紀末から20世紀初めにかけての時期において大型機械を用いての刺繍織生産の中心は東スイスにあり、フォラルベルクはその補完的役割を果たしていたに過ぎなかった。それでもフォラルベルクの繊維工業における刺繍織生産の比重は増大する傾向にあった。1910年の人口14万5千人のフォラルベルクで、その10%強が刺繍織生産で生活できていたのである。この年に手動刺繍機械が3,600台、シフリ刺繍機械が1,400台フォラルベルクで稼働していた。シフリ刺繍機械は、綿織物工業におけるジャカード式機械と同様の機械へと発達した。つまり、パンチされたカードを用いれば熟練工としての刺繍織職人が不要となるほどに発展した。1912年でフォラルベルクのシフリ刺繍機械300台がそうした自動機械となっていた。その結果、生産性に劣る手動刺繍機械での生産は駆逐され、

この機械の多くが休機される事態に陥った(Nägele 1947: 25-26)。ただし、前述したように、Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 185)によれば、鎖編刺繍機械、手動刺繍機械、シフリ刺繍機械の生産は異なる品質の異なる刺繍商品の生産に対応するものだったので、生産効率が高いシフリ刺繍機械が他の機械を完全に駆逐したわけではない。

刺繍織は奢侈品なので、流行に左右され、景気動向に強く左右された。スイスから輸出される刺繍織は1890年に約9300万フラン、1900年に1億2400万フラン、1910年に4億1300万フランと増加した。したがって東スイスとフォラルベルクとの間でなされていた刺繍織による加工貿易の量は、19世紀末から20世紀初めまで順調に増加した。しかし、スイスからの刺繍織輸出は1925年に1億3300万フラン、1933年に2200万フラン、1935年に1300万フランへと激減した。特に世界大恐慌の影響を受けると、スイスでもフォラルベルクでも刺繍織生産は大きく下落した。その結果として、刺繍織による加工貿易の量は1907年の23,205ツェントナー(Zentner、1ツェントナーはスイスやオーストリアでは約100kgに相当する重量単位)と比べて1930年になると1,149ツェントナーへと、約20分の1にまで激減し、1934年には完全になくなった。スイスでは1920年に7万人強が刺繍織工業に従事していたが、1934年にはその10分の1以下にまで減少した。フォラルベルクでは1913年の約1万6千人から1936年の約3千人にまで減少した(Nägele 1947: 26)。

Winsauer (1968: 14)によれば、第1次世界大戦と大恐慌の影響を受けてフォラルベルクの刺繍織工業は大きな打撃を受けた(表4)。第1次世界大戦によってザンクトガレンとの間の

ローンシュティッカーにとっての加工貿易が激減し、大戦後にはオーストリア・ハンガリー帝国が消滅したので、かつての帝国内市場の多くを失った。第1次世界大戦後にはザンクトガレンとの加工貿易もある程度復活したが、大恐慌によって生産が大きく落ち込んだ(表5)。

しかし、上のようにフォラールベルクの刺繍織が東スイスの輸出業者にとっての景気の調節弁であったことを描いたナーゲレではあるが、独立自営業者として輸出業務を自ら行なう者も現れるようになったことを、Walter von Mühlwerthの著作からの引用文であるとしてNägele (1947: 27-28) は次のように述べている。ただし、その文献の書誌情報をNägeleは明示していないが、Mühlwerth (1941) であると思われる。

「外国語も駆使しかつ外国人の慣習や習性も熟知したうえで外国との恒常的な接触を通じて、そしてしばしば起きる流行の変化の故に余儀なくされる文様型紙の永久的に続く変更、そして数多くの危機の中で鍛えられた闘争力とによって、フォラールベルクの刺繍織ファブリカントは、特有の大きなエネルギーと粘り強さ、想像力と柔軟性という点で傑出した企業家タイプとなった。彼は本当に素晴らしい輸出の経験を持ち、市場の変化に稲妻の如くに素早く適応する能力を持っている。それ故、フォラールベルクの刺繍織工業があらゆる危機、多かれ少なかれ

大きな損失を被った最もひどい恐慌をもとめせずに、今日に至るまでフォラールベルク経済において尊敬される地位を保持しているのは、状況を熟知している者にとってなんら驚くことではない。」(Nägele 1947: 27-28)

上の引用文に続いてNägele (1947: 28) は、フォラールベルク経済における刺繍織工業の地位は第1次世界大戦以前ほどではないが、東スイスでは1946年に8千万フランの輸出を実現したので、フォラールベルクでも刺繍織の材料さえ入手できればかつてと匹敵するだけの隆盛を実現できるであろうと述べている。

つまり、板倉 (1975: 18-19) が、ザンクトガレンの刺繍織を世界大恐慌によって壊滅的な打撃を受けてその後復興しなかったが、フォラールベルクのそれを農業との兼業であるがゆえに世界大恐慌時に耐え忍び、第2次世界大戦後隆盛するようになったと述べたのは、不正確だったと言わざるを得ない。ただし、ルステナウの刺繍織業者が小さいとはいえ農地や園芸地を保持していたがゆえに、刺繍織製造が困難を極めた時期であっても生活を維持できたという板倉の指摘は正しい。その実情をWinsauer (1965: 47) が、フォラールベルクの刺繍織企業の約3分の2と農業との関係に関して第2次世界大戦勃発直前に自身で行なった調査結果を次のよう

表4 フォラールベルクとスイスとの間の刺繍織加工貿易の量

年	量 kg
1915	1,564,000
1916	765,700
1917	50,500
1918	39,800

出所: Winsauer (1968: 14)。

表5 フォラールベルク独自の刺繍織輸出額の変化

年	金額 シリング
1928	77,955,000
1930	40,638,000
1932	23,048,000
1934	15,672,000
1936	11,655,000
1938	9,507,000

出所: Winsauer (1968: 14)。

に描いている。

刺繍織企業は兼業農家であり、そのすべての耕地と牧草地を合計すると250 haに及び、1企業当たり平均して70 aの農地を経営していた。それら企業の66%がジャガイモを、21%がトウモロコシを、67%が野菜を、76%が果物を、20%が牛乳を自給していた。所有する果樹の平均本数は20本であり、25%が果物を販売していた。このような農業との兼業の故に、刺繍織の仕事が不況のためになくなった時にも、刺繍織企業の家族は生存できた。1933年4月1日にはフォラールベルクにあったシフリ刺繍機械の3分の2が休機していたのである。言うまでもなく、上述の刺繍織企業はローンシュティッカーである。

上のような農業とローンシュティッカーとの結びつきを述べたということは、ヴィンザウアもまた、19世紀末から1930年代にかけてのフォラールベルクの刺繍織工業がザンクトガレンの商人に依存していたことを認めたことになる。ただし、Winsauer (1965: 16-19) は「依存」というよりも「結びつき」の強さと表現している。これを象徴する第1は、ドルンビルンに設立された国立刺繍織専門学校の校長を1890年から1923年にまでわたって4名のスイス人が相次いで担い、最初の教師もスイス人だったという事実であるという (Winsauer 1965: 16)。

東スイスとフォラールベルクの刺繍織生産の結びつきの強さを象徴する第2は、「東スイスとフォラールベルクの刺繍織工業中央連合 (Zentralverband der Stickereiindustrie der Ostschweiz und des Vorarlbergs)」の1885年7月14日設立である。これには輸出業者やファブリカントだけでなくローンシュティッカーも加入した。しかも、東スイスでは合計18,990台の手動刺繍機械で生産する10,476名の事業者が中央

連合に結集したし、フォラールベルクでは合計2,809台の手動刺繍機械で生産する2,421名の事業者がそれに結集した。加盟しなかったのは東スイスではわずか52名 (56台)、フォラールベルクでは62名 (71台) でしかなかった。中央連合の目的は、輸出業者とローンシュティッカーとの間の契約が適正になされるよう、東スイスとフォラールベルクの刺繍織事業者を協同組合的な組織として統合することにあった。つまり、刺繍織の高品質の維持、適正な賃織り代金、手動刺繍機械の適正な稼働時間、刺繍文様の模倣の阻止などを目的としていた。(Winsauer 1965: 17)

Winsauer (1978: 1) には、中央連合が、東スイスやフォラールベルクの各地で設立されていた刺繍機械の所有者、刺繍織企業経営者、その被雇用者が自由意思で加入できる団体 (Vereinigungen) の連合体であることが記されている。これらの団体は1880年代初めに設立されており、ゼクツィオン (Sektion) と呼ばれた。中央連合の本部はザンクトガレンに置かれた。ゼクツィオンはゲマインデごとに結成された。その一つがアルタハのゼクツィオンであり、これは1886年9月16日にインスブルックのオーストリア・ハンガリー帝国の皇帝かつオーストリア国王の代官 (k. k. Statthalterei) によって公認された。(Winsauer 1978: 1)

中央連合のもとで取り交わされた契約がある場合には、たとえ大恐慌を経験した時期であっても、フォラールベルクのローンシュティッカーの中には東スイスの輸出業者の注文を受けて刺繍織を継続できた者もいた。というのは、1932年と1934年の2回、東スイスのローンシュティッカーが、スイスとオーストリアの国境を成すアルペンライン川にかかっている橋を占拠し、フォラールベルク産になる刺繍織のザンク

トガレンへの輸送を阻止したことがある、と Winsauer (1965: 18) に記されているからである。前述したように、ネーゲレは1934年に東スイスとフォアールベルクとの間の刺繍織加工貿易がなくなったと述べたが、それは大恐慌そのものによってだけではなく、ルステナウと対岸のザンクトガレン州アウ (Au) との間にかかる橋を渡っての荷物輸送が阻止されたことに拠ったと考えられる。

とはいえ、Winsauer (1965: 22) は、1945年まで東スイスの輸出商とフォアールベルクのローンシュティッカーとの間の賃織り加工貿易が手動刺繍機械での生産でもシフリ刺繍機械での生産でも存続した、と述べている。ただし、どちらの機械を用いるにせよ、フォアールベルクのファブリカントの中には東スイスの輸出商に依存せずに独自に販路を開拓してこれを維持する事業者もいたと述べている。

ついでながら、Winsauer (1965: 17) は1929年の世界大恐慌を受けて販売高が急減したフォアールベルクの刺繍織工業を救済するために、「危機基金法 (Krisenfondgesetz)」が1932年に制定された、と書いている。その一方で、第1次世界大戦の影響を受けて販売高が落ち込んだ刺繍織企業を救済するために、フォアールベルク州政府が1926年に「刺繍危機基金法 (Stickereikrisenfondgesetz)」を制定した、とも Winsauer (1965: 39) は書いている。刺繍危機基金法が制定されたのが1926年なのか1932年なのか、それとも2度にわたって制定されたのか、ヴィンザウアの記述だけからでは不明だが、Stickereikrisenfondgesetz と Vorarlberg という2つの用語をキーワードとして Google のサーチエンジンで検索すると、「1932年の第13回フォアールベルク州議会議事速記録に添付された15番目

の書類 (15. Beilage im Jahre 1932 zu den stenogr. Sitzungsberichten des XIII. Vorarlberger Landtages.) と題する pdf 書類³⁰⁾ が閲覧できる。これによると、「フォアールベルクにおける刺繍織事業のための危機基金の創設 ((die Schaffung eines Krisenfondes für die Stickerei in Vorarlberg)) が州議会で決定されたこと、この法律が「刺繍危機基金法 (Stickereikrisenfondgesetz)」と略称されたことが分かる。

その条文を読むと、ファブリカント、ローンシュティッカー、フェルガーは、それぞれの売上代金から一定の金額を基金に拠出することが義務づけられている。つまり基金は、刺繍織企業が経営危機に陥った場合に救済金を得るための保険の機能を持つと分かる。しかし、実際に危機に陥った場合にどれだけの救済金を得られるのかについての条文がない。それゆえ、この危機基金が有効に機能したかどうか不明である。

5. おわりに

フォアールベルクとその村の1つだったルステナウが経済的に発展したのは、東スイスから刺繍織の仕事が入ってきたことによる。Winsauer (1968: 3) は1864年12月3日発行の Vorarlberger Landeszeitung に掲載された村年代記 (Dorfchronik) から読み取れることとして、「刺繍織がわが邦 (ラント) にとって最重要の稼ぎとなっていた。それは銀貨で何千グルデンもの賃金を隣国のスイスから稼ぐことによってである。家族の維持のためにこの収入が与えられるという状況を無視することは許されない。」と引用している。他方、Nägele (1949: 219-226) は、「フォアールベルク刺繍織工業の心臓部 ルステナウ (Lustenau, das Herz der Vorarlberger

Stickereiindustrie)」という章を設け、第2次世界大戦終了間もない時点でルステナウの人口を上回るのはブレーゲンツ、ドルンビルン、フェルトキルヒの3都市しかなく、19世紀にはもう1つの都市ブルーデンツや、市場町であるホーエネムス、ゲッツイス、ランクヴァイルなどもルステナウの人口を大幅に上回っていたにも拘わらず、ルステナウが急速に成長してブルーデンツや3つの市場町の人口を越えたのは何よりも刺繍織工業のおかげであり、フォルールベルクの刺繍織工業の中心にルステナウがなっている、とその219頁で述べている。

ルステナウがその地位を獲得したのは刺繍織工業がフォルールベルクで誕生してから100年以上たった1870年代以降のことである。18世紀半ば頃に始まった刺繍織は農家婦人や少女を主たる担い手とする手作業によるものだった。その中心はブレーゲンツァーヴァルトという山間地域だったとされているし、東スイスからその仕事が最初に持ち込まれたのもその山間地域だったというのが通説である。しかし、刺繍織の手仕事よりも早く綿の糸紡ぎや織物に関する手仕事がラインタールの農村部で行なわれていた。綿紡績・綿織物の機械工業化が進んでその仕事がなくなると、刺繍織の手仕事がそこに入ってきたと考えられる。ラインタール北部や中部の農村はブレーゲンツァーヴァルトよりも東スイス、特にその中心であるザンクトガレン市により近いし、18世紀半ば頃の交通手段から考えればラインタールの農村でも手仕事での刺繍織が早くに始まったと考えられる。

それは、東スイスとフォルールベルクとの刺繍織加工貿易の輸送を担ったフェルガーがラインタール北部の農村でまず現れたことによって分かる。フェルガーの仕事を担う人々は、その

後まもなくブレーゲンツァーヴァルトの農村居住者の中からも多数現れた。フェルガーは東スイスの輸出商から刺繍織のための材料を受けとり、これをフォルールベルクの農家内職者に送り届け、後者が賃織りした製品を東スイスの商人に届ける役割を担ったが、農家内職者に支払う賃織り代金はオーストリアの通貨であり、仲介手数料は東スイスの商人から完成品を届けた際にフランで受け取った。つまり、内職者に払う賃織り代金のための資金を事前に持っている必要があったし、仲介者として必要な文字や数字に関するリテラシーを備えていなければならなかった。しかも製品検品能力も必要だった。19世紀初めには大規模化したフェルガーも現れていたが、彼らはフォルールベルクのラインタールに位置するいくつかのゲマインデの名望家層に属していた。

フェルガーの中で企業家精神を持っていた人たちは、量産用の刺繍機械が開発されるとこれを自前の工場に設置してファブリカントになった。彼らの中から、東スイス特にザンクトガレンの輸出商に依存せずに独自に輸出販路を開拓する者も現れた。しかし、圧倒的多数の刺繍織企業は、輸出商やファブリカントから材料を支給されて家族だけで生産のみに従事し、賃織り代金を受け取るローンシュティッカーだった。ローンシュティッカーは東スイスの方がフォルールベルクよりも圧倒的に多かった。

フォルールベルクのファブリカントやローンシュティッカーは、居住する各ゲマインデ単位で協同組合的な組織を1880年代に結成した。これらは1885年に東スイスのローンシュティッカー・ファブリカント・輸出商とともに刺繍織工業中央連合を結成した。フォルールベルクのローンシュティッカーは景気の調節弁としての

役割を担わされたが、たとえスイスからの刺繍織輸出が不況のために、さらに世界大恐慌のために減少したとしても、東スイスとフォラールベルクとの間での刺繍織加工貿易は継続した。しかし、輸送ルートとなっていたアルペンライン川の橋が東スイスのローンシュティッカーたちによって封鎖されたが故に1934年をもってそれが消滅したとする説がある一方で、第2次世界大戦時にまで継続したとする説もある。

景気の変動にも拘わらずフォラールベルクのローンシュティッカーを含む刺繍織企業が存続し得たのは、彼らが兼業農家として生存に必要な食料品をある程度自給できたからである。そのことはフォラールベルクだけでなく、東スイスの農村部に居住していたローンシュティッカーにも当てはまるであろう。

したがって、ルステナウは1860年代末から1930年代半ば頃まで、刺繍織という地場産業の独自産地だったわけではなく、都市ザンクトガレンを中心とする東スイスとフォラールベルク、さらにボーデン湖に近いドイツの領域も含めて、刺繍織という産業に特色を持つかなり広大な地理的広がり的一部分だったと理解するのが妥当である。刺繍織機械を開発生産する企業はスイス側にあったし、遠く離れたドイツのザクセン王国にもあったが、フォラールベルクにはなかった。

ただし、フォラールベルクのライントール中部の幾つかのゲマインデが協力して、独自性を持つ一体的な産地へと発展しようとする動きがあった。それは国立刺繍織専門学校がドルンビルンに設立されたことに表れている。またルステナウの有力ファブリカントの中にはザンクトガレン商人への依存から脱却する者も19世紀末から現れた。ルステナウにはフォラールベルク

最大の刺繍織ファブリカントが立地しただけでなく、他のゲマインデよりも多くのファブリカントとローンシュティッカーが活動していたので、遅くとも1880年代以降においてこの場所がフォラールベルクの中での刺繍織生産の中心をなしていたことは確かである。

付記：本稿は2019～24年度に日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）（一般）の助成を得て実施した「エコ社会的市場経済原則の下での「場所に関する戦略的経営」の経済地理学的研究」（課題番号19K01191）による研究成果の一部である。

注

- 1) 3名はルステナウを村と表現しているが、彼らが現地調査した時点で既にルステナウは町と表現できるゲマインデ即ち基礎的地方自治体だった。それはルステナウが1902年にフランツ・ヨーゼフ皇帝によって「マルクトゲマインデ (Marktgemeinde)」^{いちぼまち}即ち市場町へと昇格されたからである (<https://www.lustenau.at/de/leben-in-lustenau/lustenau-portrait/geschichte> 2026年6月30日閲覧)。彼らがルステナウを村と表現したのは、そこで生まれ育ち、彼らを案内してその略史と1970年前後の状況を解説したモイスブルガーが、自身の故郷をドルフ (Dorf) 即ち村と表現したからであろう。後にハイデルベルク大学教授となったモイスブルガーは、2000年代においてもなお筆者に対してルステナウを村と表現していた。彼がなぜそう表現したのか推測するしかないが、19世紀後半に入る頃まで貧しい村だったという歴史と、インスブルック大学在籍期においてもなお、中心部を除けば村と表現できる家屋畑地景観をルステナウの大部分が呈していたからと考えられる。ちなみにルステナウ歴史文書館のホームページから1826年から2008年までの年次を異にするルステナウの地図7枚を閲覧できるので、これで確認すると2008年時点でも中心街のカイザー・フランツ・ヨーゼフ通りとマリア・テレージア通りであっても建物の連

坦が余り認められない (<https://www.lustenau.at/de/freizeit/kultur/historisches-archiv/material-zur-geschichte-lustenau> 2025年7月20日閲覧)。しかし筆者が2016年に現地を徒歩で観察したところ、市場広場を境にして上記2つの連続する通りには商業施設が立ち並んでおり、シャッター通りでもなく、明らかに都市の様相を呈していた。しかし、裏通りに入ればかなり広い庭園が個別の建物に付属しており、言うなれば田園都市的景観を呈する部分が多かった。なお、Vorarlbergを3名共にフォーラルベルクと表記しているが、筆者がモイスブルガーや他の現地育ちの識者、そしてテレビニュースでのアナウンサーの発音を確認したところ、フォーラルベルクと表記するのが妥当である。

- 2) 3名の現地調査は、それぞれの論攷の末尾で謝辞を記していることから明らかなように、モイスブルガーの案内と、同行した京都大学助教授(当時)浮田典良による支援によって可能になった。モイスブルガーは英語が堪能なので3名に対して基本的に英語で解説したと推定されるが、ドイツ語で表現されたことやドイツ語文献の解説については浮田の支援によったと推定される。こう推定できるのは、3名の論文に記されているドイツ語には誤記が比較的多く散見されるからである。
- 3) 彼らの論文の間にみられる違いの一つに工業名称がある。井出が「スティッケライ工業」という用語で刺繍生産を表現する一方で、日本での産業分類の実態も考慮してレースも含めて刺繍レースと表現し、フォーラルベルク州内での地理的分布を3枚の地図で示し、それぞれに「1946年フォーラルベルクのレース工業分布」、「1952年フォーラルベルクの鎖結びレース工業の分布」、「シフリーマシンの分布(1969、10現在)」というタイトルを付した(井出 1970: 29-31)。これに対して竹内(1974: 67)は「Vorarlberg州のStickereiの場合には一般にレースと呼ばれる製品を広く生産している」と述べ、論文の中ではStickerei工業と表現する一方で、井出が提示した3枚の分布図と類似する分布図を、ただし記号の種類を変えて提示しているが、例えば「鎖結びレース生産者の分布(1956年)」というタイトルをつけるなど、井出

とは微妙に異なる表現をしている。他方、板倉は一貫して刺繍工業と表現しているが、井出が作成した図の1枚を修正して、「フォーラルベルクのシフリー・マシン分布図」というタイトルで掲載している。どのような修正を施したのかについては明確に書かれていないが、シフリーマシンが多く設置されているゲマインデの名称を書き換えている場合が幾つかある。上記3名の中で地理的分布図作成のために利用した資料名を明記しているのは井出だけである。また3名が利用したルステナウ、フォーラルベルク、そしてオーストリア全体の刺繍織・レース工業に関する資料はモイスブルガーから得たものだが、その資料の正確な名称記載の不備という問題もある。

- 4) 井出・竹内・板倉が刺繍ないしレースに工業という文字を付加しているのに対して、黒澤は「刺繍業」と表現している。自然界から抽出されたものであれ、人が作り出したものであれ、なんらかの原材料を加工して形あるものにする営みはたとえ手作業によるとしても工業と表現して差し支えないが、「刺繍業」と表現したのは量産ではなくクラフト的生産であることを示唆するため、と解釈できる。
- 5) 黒澤(2002)はオーストリア人による文献としてNägele(1949)とWeitensfelder(1991)も利用しているが、彼自身の研究目的の故に20世紀半ば頃以降のフォーラルベルクの繊維工業とその一部である刺繍織・レース工業の発達については論じていない。
- 6) 本稿で刺繍織・レース工業と表現するのは以下のような背景があるからである。井出(1970: 26-27)は刺繍とレースの各意味を『広辞苑』や日本での工業分類などに依拠して解説しているが、最終的にこの2つの商品を同一視し、1970年前後にルステナウで生産されていた商品をレースと表現している。他方、竹内は井出の考えに概ね沿ってはいるがStickerei(シュティッケライ)というドイツ語の商品名をそのまま用いている。しかし板倉は一貫して刺繍と表現している。これらに対して黒澤(2002: 110)は刺繍を意味するドイツ語がStickereiであるのに対して、レースを意味する

ドイツ語が Spitzen (シュピッツェン) であると述べ、刺繍とレースとは本来異なることを指摘しつつも、その区別が曖昧になったと注記している。

確かに、20世紀半ば過ぎのフォラルベルクにおける産業の実態を部門別に詳細に記録した『フォラルベルク商業会議所百年史』では Stickerei と Spitzen とは素人の眼からすれば同一に見えるが、専門家や賢い女性は明確に区別すると述べている (Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg 1952: 180)。これによれば、「あらゆる刺繍の前提条件は織物 (Gewebe) であって、これに何らかの方法で針と糸とで装飾することを刺繍は意味するが、レース (Spitzen) は撚糸を織りあげる作業によって精巧な織物をかたちづくることであり、それゆえレースは仕上げ加工 (Veredelung) を必要としないが、刺繍はそれを必要とする」とのことである。

Veredelung とは、精製あるいは洗練を意味する。繊維工業については、素材や一応完成した商品に対して化学的・技術的な加工工程を施すことによって、その品質を高めることを意味する (<https://massgestickt.de/blog/textilveredelung/> 2025年7月6日閲覧)。Nägele (1949: 85-93) には「精製工業 (Die Veredelungsindustrie)」という章が設けられており、漂白 (Breichereien)、染色 (Färbereien)、捺染 (Druckereien)、光沢を施すことも含む仕上げ加工 (Appreturen) をその用語が意味する、とその85頁に記されている。

また、Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952: 184-201) では刺繍織工業 (Stickereiindustrie) の実態が A 4 版 1 頁 2 段組みで非常に詳しく扱われているのに対して、レース生産については Klöppelspitzenerzeugung (レース編み生産) というタイトルで同書の180~184頁において比較的簡略に扱われている。Stickerei には Industrie という単語を付加しているのに対して Spitzen に対しては Klöppel (糸巻棒) という用語を前に付し、Erzeugung (生産) という単語を後に付加している。それは、Industrie が機械を用いた工場生産であるのに対して、レース生産は職人的な手工業生産であることを意味していたからで

あると考えられる。

しかし、2010年代における筆者の現地観察や Hessenberger (2016) によれば、現在のルステナウで生産されているシュティッケライは、布地に何らかの模様を糸と針で施すというのではなく、多数の針を装備した機械で糸から織りあげた薄地の布、即ち織物が主流をなしており、西アフリカ諸国を主たる市場とするアフリカンレース (African Lace) とも表現されている。そこで本稿では、シュティッケライを刺繍織・レースと表現することにした。ただし本稿のために検討したドイツ語文献では Stickerei という用語のみを用いているので、文脈に応じてレースという用語を省く場合がある。なお、定評ある現代ドイツ語辞典である Wahrig (1975: 3534) によれば、本来 Stickerei という単語は製品を意味するとともに、刺繍生産という仕事も意味する。筆者の現地での会話経験によれば、そこから転じて刺繍織・レースを生産する事業所ないし企業も意味すると考えられる。

7) この人物は、スイスのザンクトガレン商業管理局 (das Kaufmännische Directorium) の事務局長で経済史家でもあり、ザンクトガレンの産業発達史に関する古典である Wartmann (1875) を著わした。フォラルベルクをテクスティールラントと命名し、その繊維工業発達史を描いた Nägele (1949: 7-8) はその古典に匹敵するフォラルベルクの繊維工業発達史に関する書籍がないことを残念に思い、その欠落を埋めるべく自ら『繊維のくに フォラルベルク (Textilland Vorarlberg)』を出版したと述べている。ザンクトガレン商業管理局は対外商取引に関する業務を単にザンクトガレンのためだけでなく、スイス全体のために行なうとともに、商業に関する法的土台の確立に貢献した。他方においてザンクトガレンのファブリカントや企業家たちは1875年にザンクトガレン商工業協会 (Handels- und Industrieverein St. Gallen) を設立した。この組織は外国との自由な商業活動の推進を目的とし、それに関する法律制定にも影響力を発揮すべく活動した。上の2つの組織は1991年に合併してザンクトガレン・アッペンツェル商工会議所 (Industrie- und Handelskammer (IHK) St.Gallen-Appenzell)

- となった。商業管理局の設立よりもはるか前の1466年にザンクトガレンの商人たちの活動を支援する組織としてノーテンシュタイン協会 (Gesellschaft zum Notenstein) が既に設立されていた。これは商業管理局の前身とみなしうる。それ故、ザンクトガレン・アッペンツェル商工会議所はスイス最古の商工会議所であり、おそらく欧州最古であると言われている。以上の情報は同会議所のホームページ (<https://www.ihk.ch/geschichte/> 2025年6月18日閲覧) による。
- 8) 井出 (1970) は鎮結びと和訳し、竹内 (1974) と板倉 (1975) はそれに倣っている。
- 9) フォラルベルクでの工場制綿紡績工業は既に1850年代に出現していたし、その後、綿織物製造も含めて綿工業の工場は少なからず設立され、その中心となったドルンビルンはライントールのマンチェスターと呼ばれたほどである (Fessler und Matt 2023、Vorarlberg ORF.at 6.5.2023)。フォラルベルク最大の綿工業企業の基礎を築いたフランツ・マルティーン・ヘンメルレ (Franz Martin Hämmerle) は水力を利用できるドルンビルンの山間部の谷に綿織物工場を1846年に建てたし、1864年には綿紡績工場も同じドルンビルンの別の谷に建てて操業を開始した (Land Vorarlberg 2005: 136)。後者の工場では1867年に男性52名、女性42名が工具として働いていた (Fessler und Matt 2023: 16)。黒澤によるフォラルベルクの繊維工業の性格づけは刺繍織・レース製造だけに着目したものと云わざるを得ない。
- 10) この研究書の著者は、その著者紹介によれば当時ウィーン技術博物館に勤務していたが、現在ウィーン大学経済社会史研究所 (Institut für Wirtschafts- und Sozialgeschichte an der Universität Wien) の講師である (<https://wirtschaftsgeschichte.univie.ac.at/en/people/lecturerssenior-lecturers/weitensfelderhubert/> 2025年7月21日閲覧)。
- 11) カール・ガナールの事蹟についてはKolb (1952) が詳しい。その要旨については山本 (2024: 431) を参照されたい。
- 12) クリステイアン・ゲッツナーはフェルトキルヒの東南方向に位置するザットアインス (Satteins) の農家で誕生し、成長した。彼の生家はカール・ガナールの父親であるヨハンヨーゼフ・ガナール (Johann Josef Ganahl) の委託で手作業での綿糸生産を副業として営んでいた (Land Vorarlberg 2005: 126)。ゲッツナーに関するより詳細なことは山本 (2024: 237-239) を参照されたい。
- 13) この学校は現在の連邦技術後期中等教育学校ドルンビルン校 (Höhere Technische Bundeslehr- und Versuchsanstalt Dornbirn, 略称 HTL Dornbirn) の前身である。
- 14) 次のウェブサイトから各種の情報を入手できる。
<https://s-mak.at/>
<https://www.sticker.at/>
いずれも2025年7月20日閲覧。
- 15) 筆者はNägele (1947) とNägele (1949) のどちらもフォラルベルク州立図書館で閲覧したが、前者は比較的コンパクトな書籍なので全文を閲覧できたが、後者は筆者のフォラルベルク滞在期間の短かさの故もあってその一部分しか閲覧できなかった。
- 16) ちなみにヘルマン・ヴァルトマンは1835年にザンクトガレンで誕生し、チューリヒ、ボン、ゲッティンゲンの各大学で歴史学と文献学を学び、チューリヒ大学で博士学位を取得した後に、ザンクトガレン市議会やザンクトガレン商業管理局の書記として勤務し、ザンクトガレン市、ザンクトガレン州、スイス国会議院の議員も務めたことのある人物である。さらにザンクトガレン州歴史学協会やスイス歴史学協会の役員も務めたことがある (Historisches Lexikon der Schweiz による <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/004035/2024-08-16/> 2025年4月2日閲覧)。ザンクトガレンの商工業史に関する著作 (Wartmann 1875) は第1級の研究書として知られている。
- 17) Historisches Lexikon der Schweiz <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/013963/2012-03-23/> 2025年6月23日閲覧。
- 18) Historisches Lexikon der Schweiz <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/001309/2010-08-19/> 2025年6月23日閲覧。
- 19) 板倉 (1975: 19、1978: 295) は、輸出業者とロー

ンシュティッカー (Lohnsticker、即ち機械を用いて賃織で刺繍を生産する小規模企業) とを仲介するフェルガーマイスター (Fergermmeister) がいると述べ、証券取引所における才取に似たような存在であろうと記した。本文で述べるように、もともとフェルガーとは資格を持つ職人を意味する用語ではないので、これにマイスターという用語を付すことはかつてなかったと考えられるが、板倉は現地調査をした際にその言葉を聞いたものと推測される。ただし Heintzle (2018: 33) によれば、「フェルガーマイスターは、独立した企業家だったかつてと対照的に、いわゆるローンシュティッカーに依頼する刺繍織輸出企業の職員として商品の集荷と品質管理の権限を持ち、今日でもなお荷物の引き渡しをしている」とのことである。フェルガーの手数料は23% から33% の間にあったと Brüstle (1965: 20-21) に依拠して Heintzle (2018: 33) は述べている。つまり、かつてのフェルガーは仲介手数料を得るという意味で才取に類似していたかもしれないが、運送業者でもあったので才取とは異なるし、板倉が調査した頃のフェルガーマイスターはもはや独立した事業者ではなく、刺繍織輸出企業やファブリカント (工場での機械織を営む企業経営者) に雇用されていたと理解するのが妥当である。

- 20) 東スイスやフォラルベルクで、刺繍織・レース製造のための機械を複数台所有し、たとえ小規模であっても工場も所有して自身が生産材料を購入し、自身の責任で刺繍織を生産して販売する企業経営者のことをファブリカントと称する。その中には輸出業務まで行なう者がいた。そのことを井出、竹内、板倉はファブリカン (Fabrican) と表記している。他方、刺繍織機械を1~2台しか所有せず、刺繍織のための素材を自ら購入するのではなく、輸出業者あるいはファブリカントから預かって家族だけで賃織りをする業者のことをローンシュティッカーと呼ぶ。
- 21) 具体的には以下の村々や都市の名称が挙げられている。ヘーヒスト、ガイサウ (Gaißau)、フーサハ (Fußach)、ハルト (Hard)、ブレーゲンツ (Bregenz)、ローハウ (Lochau)、ヘルブランツ

(Hörbranz)、ビルトシュタイン (Bildstein)、ラウテラハ (Lauterach)、ヴォルフルト (Wolfurt)、シュヴァルツアハ (Schwarzach)、ドルンビルン (Dornbirn)。

- 22) ランゲン (Langen)、ズルツベルク (Sulzberg)、リーフェンスベルク (Riefensberg)、アルバーシュヴェンデ (Alberschwende) が挙げられている。
- 23) ズィブラーツゲフェル (Sibratsgefäll)、ヒッティザウ (Hittisau)、リングенаウ (Lingenau)、クルムバハ、ランゲネク (Langenegg)、エック (Egg)、アンデルスブーフ (Andelsbuch)、シュヴァルツェンベルクが挙げられている。
- 24) ショップペルナウ (Schopperrau)、アウ (Au)、シュネプファウ (Schneppfau)、メラウ (Mellau)、ロイテ、ビーツァウ (Bizau)、ベーツァウ (Bezau)、バイエン (Beien bei Schwarzenberg) が挙げられている。
- 25) この文献には各頁にページ番号が印刷されていないが、当該記述の個所を表紙から数えて頁番号を同定した。
- 26) <https://www.hoh.at/firmengeschichte> 2023年9月23日取得。ちなみに、筆者が2023年9月に訪問したルステナウの刺繍織・レース企業は Hofer Hecht Stickereien である。Hecht とはカワカマスのことであり、ルーペルト・ホーファーの岳父が経営していた飲食店の名物料理の素材だったと推定される。上記の刺繍織・レース生産企業のロゴマークにはカワカマスの絵が用いられている。この企業の現在の正式名称は Dr. Josef Hofer GmbH (ヨーゼフ・ホーファー博士有限会社) である。ヨーゼフは第3代目の社長である。
- 27) アルトシュテッテンとは、ルステナウからさほど遠くないアルペンライン川左岸に位置する小都市であり、ザンクトガレン州に属する。
- 28) https://austria-forum.org/af/Wissenssammlungen/Essays/Historisches_von_Graupp/LUSTENAU_STICKEREI 2025年7月4日閲覧。このウェブサイトはルステナウにおける刺繍織工業の発展を簡潔に記載したものである。このウェブサイトには記述の典拠として次の文献を挙げている。QUELLE: Gemeinde Blatt Lustenau, 31 Oktober

- 1886, S 3, Feldkirchner Zeitung 6. Februar 1892, S 2, 19. Februar 1892, S 1, Werbebilder. このウェブサイトではエドゥアルト・アルゲガルステナウの村長 (Bürgermeister) を務めたと記されているが、ルステナウの「家族名簿 (Familienbuch)」によれば、村会 (Gemeindeausschuß) によって選任される村の代表 (Vorsteher) を1896年から1899年までの3年間務めたと記されている。 <https://lustenauer-familienbuch.at/Varia/Rathaus.html> 2025年7月4日閲覧。
- 29) https://austria-forum.org/af/AustriaWiki/Bundeshandelsakademie_und_Bundeshandelsschule_Lustenau 2025年8月3日閲覧。この学校は後に連邦立となった。このウェブサイトでの記述の典拠はBHAK/BHAS Lustenau (Hrsg.): Festschrift 100 Jahre Handelsschule Lustenau. Lustenau März 2004であるとされている。
- 30) [https://suche.vorarlberg.at/vlr/vlr_gov.nsf/0/BE1F75F424EA1406C125822D002A2CCF/\\$FILE/B%201932%20015%2019320000%20Stickereikrisenfondgesetz.pdf](https://suche.vorarlberg.at/vlr/vlr_gov.nsf/0/BE1F75F424EA1406C125822D002A2CCF/$FILE/B%201932%20015%2019320000%20Stickereikrisenfondgesetz.pdf) 2025年7月5日取得。
- pp.63-76。
- 山本健児 (2024) 『「隠れたチャンピオン」を輩出する地域—欧州における小規模農村的地域の事例—』古今書院。
- 山本健児 (2025) 『ドイツ経済の地域構造—その変動の諸要因と変わらざる特質—』原書房。
- Brüstle, Ferdinand (1965) *Die Entstehung und Entwicklung der Vorarlberger Stickereiindustrie*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt. (筆者未見)
- Ebenhoch, Ulrike (1993) Die Stickereiindustrie. In: GFW (Gesellschaft für Wirtschaftsdokumentation) Verlag (Hrsg.) Vorarlberger Wirtschaftschronik. Wien: GFW Verlag, S.99-106. (筆者未見)
- Fessler, Klaus und Werner Matt (2023) *Stadtspuren. Industrie und Wandel*. Dornbirn: Stadtarchiv Dornbirn.
- Feurstein, Christian (2009) *Wirtschaftsgeschichte Vorarlbergs von 1870 bis zur Jahrhundertwende*. Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft mbH.
- Fink, Barnabas (1931) Die Wirtschaftsverhältnisse in Vorarlberg (筆者未見 これは書籍ではなくなんらかの雑誌又は新聞に掲載された論攷であるが、その抜き刷りないし複写がフォラーベルク州立図書館に収蔵されている)。
- Fitz, Arno Johannes (1985) *Die Frühindustrialisierung Vorarlbergs und ihre Auswirkungen auf die Familienstruktur* (Vorarlberg in Geschichte und Gegenwart 2), Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt. (筆者未見)
- Hagen, Mathilde (1947) Die Vorarlberger Baumwollindustrie. Dissertation an der Hochschule für Welthandel in Wien (筆者未見)。
- Heinzle, Oliver (2018) Über die Anfänge der Stickereigeschichte in Lustenau. In: *Neujahrsblätter des Historischen Archivs der Marktgemeinde Lustenau*, 7./8. Jahrgang, S.32-78.
- Hessenberger, Edith (2016) *SpitzenZeit. Vorarlberger Erinnerungen zum Stickereixport nach Nigeria*. (Vorarlberg Museum Schriften 20), Innsbruck: Studienverlag Ges.m.b.H.
- Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952) *100 Jahre Handelskammer und gewerbliche Wirtschaft in Vorarlberg*. Feldkirch: Verlag Franz
- 板倉勝高 (1975) 「ヨーロッパの地場産業と都市形成」、『流通経済論集』(流通経済大学) 第9巻第3号、pp.15-30。
- 板倉勝高 (1978) 「刺繍の村ルスティナウ」、板倉勝高 (編) 『地場産業の町 上』古今書院、pp.288-299。
- 板倉勝高 (1981) 『地場産業の発達』大明堂。これの第4章「ヨーロッパの地場産業」の「1」ルスティナウ村 (刺繍産地)、pp.97-106。
- 井出策夫 (1970) 「オーストリアの工業—Vorarlberg州の繊維工業を中心として—」、『学芸地理』(東京学芸大学地理学会) 第24号、pp.17-34。
- 黒澤隆文 (2002) 『近代スイス経済の形成—地域主権と高ライン地域の産業革命—』京都大学学術出版会。
- 竹内淳彦 (1974) 「ヨーロッパにおける農村型地場産業—Vorarlberg州 (Austria) の繊維工業を中心として—」、『日本工業大学研究報告』第4巻、

- Unterberger.
- Kolb, Ernst (1952) Die Handelskammer und die Einheit Vorarlbergs, Festrede von Bundesminister Dr. E. Kolb zur Hundertjahrfeier der Handelskammer für Vorarlberg am 30. September 1950. In: Kammer der gewerblichen Wirtschaft für Vorarlberg (1952) *100 Jahre Handelskammer und gewerbliche Wirtschaft in Vorarlberg*. Feldkirch: Verlag Franz Unterberger, S.5-11 (ただし、この記念出版物のこの部分にページ番号は付されていない。ページ番号が付されているのは17頁からであり、そこから前の方のページを筆者が数えてページ番号を特定した)。
- Land Vorarlberg (Hrsg.), Wolfgang Scheffknecht (Redaktion) (2005) *Vorarlberg Chronik*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt, 3. überarbeitete und erweiterte Auflage.3.
- Linder, Fritz (1956) Dissertation über “Der Export der Vorarlberger Stickereiindustrie”. Universität Innsbruck.
- Mühlwerth, Walther (1941) *Probleme der Vorarlberger Stickereiindustrie : ein Beitrag zur Geschichte der Vorarlberger Industrie*. Dissertation der Universität Innsbruck. (筆者未見)
- Nägele, Hans (1947) *Die Vorarlberger Textilindustrie*. Wien: Bindenschild-Verlag.
- Nägele, Hans (1949) *Das Textilland Vorarlberg—Werden und Wachsen einer alpenländischen Industrie*. Dornbirn.: Vorarlberger Verlagsanstalt.
- Pichler, Meinrad (2015) *Das Land Vorarlberg 1861 bis 2015* (Geschichte Vorarlbergs. Band 3). Innsbruck: Universitätsverlag Wagner.
- Tiefenthaler, Meinrad (Bearbeitung) (1950) Die Berichte des Kreishauptmannes Ebner : ein Zeitbild Vorarlbergs aus der 1. Hälfte des 19. Jahrhunderts. Schriften zur Vorarlberger Landeskunde : 2. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt. (筆者未見)
- Verband der Vorarlberger Stickereiindustrie (1968) 100 Jahre Vorarlberger Stickerei-Industrie: Lustenau 25. Mai—3. Juni 1968. Lustenau: Buchdruckerei Lustenau.
- Vorarlberg ORF at. (6.5.2023) Dornbirn galt als „Manchester des Rheintals“ <https://vorarlberg.orf.at/stories/3206071/> 2025年6月17日取得。
- Wahrig, Gerhard (Hrsg) (1975) *Deutsches Wörterbuch mit einem “Lexikon der deutschen Sprachlehre”*. Sonderausgabe/ ungekürzt völlig überarbeitete Neuauflage. Gütersloh: Bertelsmann Lexikon-Verlag.
- Wartmann, Hermann (1875) *Industrie und Handel des Kantons St. Gallen auf Ende 1866*. Band 1, St. Gallen. (筆者未見)
- Weitensfelder, Hubert (1991) *Interessen und Konflikt in der Frühindustrialisierung: Dornbirn als Beispiel*. Frankfurt/New York. (筆者未見)
- Weitensfelder, Hubert (1999) *Industrie-Provinz. Vorarlberg in der Frühindustrialisierung, 1740 bis 1870*. Im Auftrag des Amtes der Vorarlberger Landesregierung. Wien und Dornbirn.
- Weitensfelder, Hubert (2001) *Industrie-Provinz. Vorarlberg in der Frühindustrialisierung, 1740 bis 1870*. Frankfurt/New York: Campus Verlag.
- Winsauer, Franz (1965) *200 Jahre Vorarlberger Stickerei — eine Plauderei, den Stickereiabteilungen der Bundestextilschule Dornbirn zu 75 Jahrfeier ihres Bestandes gewidmet*. Dornbirn: Vorarlberger Verlagsanstalt.
- Winsauer, Franz (1967) 100 Jahre Vorarlberger Stickereiindustrie. 次の雑誌のための Manuskript と考えられる。 *Jahresbericht / Bundestextilschule Dornbirn*, 1967/68, S. 18–27.
- Winsauer, Franz Gebhard (1978) Die Stickerei zur Zeit öst.-ung. Monarchie Dornbirn: Armin Hartmann. これは公式出版物ではなく、タイプ打ちの原稿を Armin Hartmann が増し刷りして配布したものと考えられる。それが製本されて州立図書館に収蔵されている。その請求記号は VOR000/WRR142/Winsa である。
- 付記：筆者未見と付記した文献のほとんどは、筆者が現地滞在中にその存在に気づかず、本稿の執筆準備のために読んだ現地の研究者などによる論文で言及されていた重要文献である。それらの書誌

情報については、フォラルベルク州立図書館に所蔵されていることを同館のホームページで確認した。

初校を終えての追記

本稿の初校をほぼ終えた後に、インターネットで Hermann Wartmann (1875) *Industrie und Handel des Kantons St. Gallen auf Ende 1866. In geschichtlicher Darstellung.* Herausgegeben vom kaufmännischen Directorium in St. Gallen. Bearbeitet von Hermann Wartmann の全文がデジタル化されていて閲覧できることに気がついた。それは、ドイツのデジタル図書館 (Die Deutsche Digitale Bibliothek) が原書を所蔵しているバイエルン州立図書館の協力を得てデジタル化したものであり、後に示す URL から閲覧できる。原書はラテン活字体ではなくドイツ活字体 (いわゆる亀甲文字) で印刷されているが、デジタル図書館のウェブサイトで容易にラテン活字体に変換してくれる。とはいえ、その変換が原本印刷不鮮明などの故に間違っている場合もあるので注意が必要である。

この点はともかくとして、Wartmann (1875) のどのページに、本稿で紹介したゴンツェンバハ家によるフォラルベルクへの刺繍織という仕事の導入に関する記述があるのか調べたところ、100～102頁であることが分かった。それを読むと、Winsauer (1965: 44) の引用記述がほぼ正確であることを確認した。ただし、カウア神父が住んでいた集落は Reute と Wartmann (1875: 100) に記されていた。その意味では Linder (1956: 12) の引用が正確だったことになる。しかしこの点を別とすれば、Winsauer による Wartmann (1875: 100-102) からの長い引用文は全体として正しく、それを受けての Winsauer が提示した疑問も当然と判断できる。ただし、その引用された原文は連続した文章ではなく、端折られた部分がある。その端折られた一節に、1853年にゴンツェンバハ家がフォラルベルクに東インド製のモスリンを送ったという一文を含む文章の後で改行して、ザクトガレンで最初に刺繍織がなされるようになったきっかけについてはさまざまな伝承があり、信頼できるとは限らないと Wartmann (1875: 100) 自身が述べている部分がある。

とはいえ、フォラルベルクという地名を明記して1753年にここでも刺繍織が開始された可能性のあることを Wartmann (1875: 100, 102) は述べていると解釈できる。ただしプレーゲンツァーヴァルトという地名は記されていない。Wartmann (1875: 102) では、まずザクトガレンで刺繍織がなされ、フォラルベルクよりも近いところにこの仕事が伝わり、そしてフォラルベルクからシュヴァーベンに刺繍織の仕事が伝わったという趣旨のことが述べられている。フォラルベルクよりも近いところとはアッペンツェルであろう。

<https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/7OHPPH62SI3Z3A4PHQHWBNWCFWFXPLC> 2025年8月19日閲覧。

[九州大学名誉教授]

Development of Embroidery Industry in Vorarlberg, Austria

—Focused on Its Origin as well as on the Era of Industrialization in Vorarlberg—

Kenji YAMAMOTO

The purpose of this paper is to re-investigate the origin of embroidery production in Vorarlberg, Austria, and its development in the era of industrialization. Although some Japanese scholars wrote articles about it, we can find inconsistency among their respective descriptions. Therefore, the present author re-investigates the development of that industry in Vorarlberg on the basis of articles written by Vorarlberg's intellectuals (Nägele 1947, 1949; Winsauer 1965, 1967, 1978; Heinze 2018), documents of industrial associations in Vorarlberg, and academic articles by a professional historian in Austria, namely Weitensfelder (1999, 2001), who investigated the industrialization in Vorarlberg on the basis of historical materials at the *Landesarchiv Vorarlberg*. Even among these Austrian scholars, we must find some inconsistency in respect of epoch-making years of the development of embroidery production in Vorarlberg. Therefore, the present author has noticed the original historical materials, on the basis of which the Austrian scholars described its development.

As a result of the critical re-investigation, it is clear that the production of embroidery was diffused about the middle of the 18th century from Eastern Switzerland. But it is not impossible to identify the precise year of the diffusion of the skill for embroidery. Although it is also difficult to identify the precise year of the first operation of *Handstickmaschine* or the symbolic machine of the industrialization or mass production of high-quality embroidery, it is sure that the industrialization began either at the end of the 1860s or in the 1870s, because all the Austrian intellectuals mentioned above referred to the year either of 1867 or of 1868 or of 1869 as the first *Handstickmaschine* in Vorarlberg.

It is important to pay attention to the role of the so-called *Fergger* or carriers with the function of brokerage for the industrialization of embroidery production in Vorarlberg. *Fergger* transported materials for embroidery from Eastern Switzerland to Vorarlberg and the final products from Vorarlberg to Eastern Switzerland. They played the key-role in the processing trade between Vorarlberg and Eastern Switzerland, area of which is comprised from three cantons, namely St. Gallen, Appenzell (Ausserrhoden as well as Innerrhoden) and Thurgau. *Fergger* must have had literacy and elementary knowledge of accounting at least and must have had monetary asset, because they paid wages in Austrian currency to the embroiderers in Vorarlberg before receiving commission fee in Swiss Franc from Swiss *Fabrikanten* (factory-owning managers) and exporting merchants.

Some *Fergger* could become independent *Fabrikanten* and exporting merchants of embroidery so early as 1880s and 1890s. This process advanced at some *Gemeinden* or municipalities on the Rhine valley. Among these places, Lustenau was most important, because the first and the largest *Fabrikant* appeared in this village and about twenty *Fabrikanten* as well as a large number of *Lohnsticker* operated *Handstickmaschinen* already in the year 1880 at this village. *Lohnsticker* owned one or two embroidery machines for mass production, but they could operate their own machine only as subcontractors of *Fabrikanten* or exporters. However, this industry was not concentrated in Lustenau, although its share was largest among the municipalities in Vorarlberg. Not only this place but also its neighboring towns and villages on the Rhine valley led the industrialization of embroidery within Vorarlberg. However, no machine makers for embroidery were born in Vorarlberg. Both *Fabrikanten* and *Lohnsticker* in this *Land* or country used embroidery machines produced either in Eastern Switzerland or in

Saxony of Germany. However, Lustenau stood out and became prosperous. Its population also grew so rapidly that the Austrian Emperor certified it as a market town in the year of 1902.

But a large number of the so-called *Lohnsticker* in Vorarlberg were dependent on the Swiss *Fabrikanten* and exporting merchants until the beginning of the 1930s, because the volume of export of embroidery was much more from Eastern Switzerland than from Vorarlberg.

(Professor Emeritus of Kyushu University)